

清末小説から 149

2023.4.1

天寶宮人「(改良戯劇)義俠記」——吳禱『俠黒奴』との違い……………沢本香子 1
劉半農「洋迷小影」——杉谷代水「(狂言)衣大名」……………荒井由美10
貢少芹漢訳『一粒鑽』の原作……………沢本郁馬17
漢訳ドーデ「ベルリン包囲」——吳禱、竊名、胡適……………樽本照雄26
清末小説から 42

★『清末民初小説目録第14b版』を公開しています。増補の規模が大きくないので「第14b版」です。また論文集『清末小説五談』も近く公表する準備を進めています。本『清末小説から』

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

天寶宮人「(改良戯劇)義俠記」
——吳禱『俠黒奴』との違い

沢本香子

エッジワース MARIA EDGEWORTH 作
「THE GRATEFUL NEGRO 感謝する黒人」
(1804)が原作だ。それを尾崎紅葉が日訳して『俠黒児』(1893)である。そこから吳禱漢訳の『俠黒奴』(1906)ができた。さらにこの吳禱漢訳を底本として戯曲に改編したものが天寶宮人編串「(改良戯劇)義俠記」(1907-

1908)という経過だ。

簡単に言えば以上の流れになる(別稿「吳禱漢訳『俠黒奴』——尾崎紅葉訳『俠黒児』」参照)。

エッジワース原作は恩義と友情の対立を主題とする。奴隷制度はその主題を際立たせるために背後に置かれるにすぎない。紅葉日訳も、それを忠実に漢訳した吳禱もその主題を継承している。戯劇化した「義俠記」も基本は同じであることを指摘しておく。

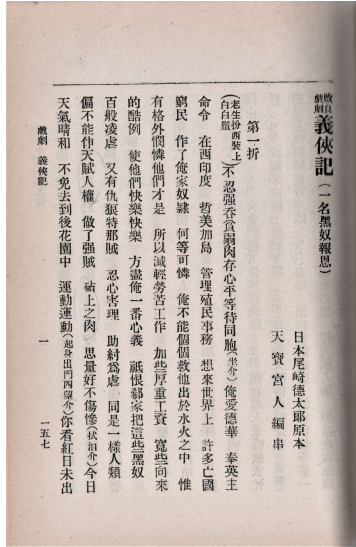
ただし細部は異なる。翻訳者、あるいは改編者による部分的な改変がある。それによって各作品における登場人物の何人かは命運が違ってしまった。つまり主題は共有するがそれぞれの物語の結末が別物になっている。ここは注目していい。

『月月小説』初出と単行本

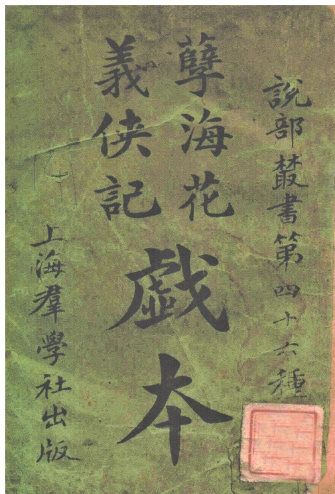
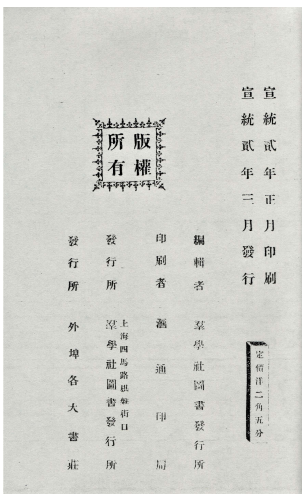
本稿で使用する版本は次のとおり。

(日)尾崎徳太郎原本、天寶宮人編串「(改

良戯劇) 義俠記(一名黒奴報恩)」8折(『月月小説』第1年第9号、第2年第1-2期(第13-14号)光緒三十三年九月初一日(1907.10.7)、戊申(1908)人日(正月初七日)・二月。第14号の角書は「忠勇戯劇」)である。



のちに単行本になった。『孽海花義俠記戯本』(編輯者: 群学社図書發行所、發行所: 上海・群学社図書發行所、宣統貳(1910)年三月發行、「説部叢書」第四十六種)だ。



影印本

柱に「月月小説」と表示する。組版と頁数を見れば初出『月月小説』からそのまま抜き刷り合本にしている。群学社は『月月小説』から抽

印した単行本をいくつか作成した。そのうちの1種だ。

天寶宮人は詳細不明。樽目録旧版には「天寶宮人(臧崙樵)」と記述する。調べたが臧崙樵とする根拠がない。誤記だと訂正する必要がある(第14版2022で訂正済み)。

呉禱漢訳が底本である根拠

「義俠記」本文には「日本尾崎徳太郎原本/天寶宮人編串」とのみ表示する。どこにも呉禱漢訳とは書かれていない。

尾崎紅葉日訳から天寶宮人が直接戯曲化したように思う人もいるかもしれない。しかしその使われる単語を見れば呉禱漢訳が底本になっているのは明らかだ。

たとえば人物名は呉禱漢訳を使用している(カッコ内は紅葉日訳。改良戯劇の役柄を添える)。

愛徳華(えどうあゝど。老生)、仇狼特(ぢゆらんと。浄)、西查(志いざあ。小生)、克拉拉(くらゝ。正旦)、海克道(へくとる。浄)、威斯薩(えすさあ。老旦)という具合だ。ただし郗菲里(じふえりい。丑)は郗斐里と1字をかえている。

あるいは同一文章がある。参考までに紅葉日訳も示す。

【紅葉】天賦の権を伸ぶるによし無くして、強者の食となりぬる。3頁

【呉禱】也是一般人類。却偏不能伸他天賦人權。做了強人的釜中魚。砧上肉。2頁

同じ人間であるにもかかわらず、ただどうにも天賦の人權を伸ばすことができずに強盗の餌食(釜の中の魚、まな板の上の肉)になっている。

【義俠記】同是一様人類 偏不能伸天賦人權 做了強賊 砧上之肉 1頁

同じ人間であるにもかかわらず、ただどうにも天賦の人權を伸ばすことができずに

強盗の餌食(まな板の上の肉)になっている。
る。

紅葉日記の「天賦の権」はエッジワース原作にはない。紅葉による優れた加筆だ。それにもとづいて呉禱が「天賦人権」に漢訳した。それをそのまま改良戯劇でも使用している。

では天室宮人が使用したのは呉禱漢訳の雑誌初出か後の単行本か。尾崎の名前が手がかりになる。

『東方雑誌』初出は尾崎紅葉と記す。後の商務版「説部叢書」本では尾崎徳太郎に変更した。天室宮人「義侠記」が徳太郎だからそれを見れば単行本の方を底本としたことがわかる。

本稿では天室宮人が独自にほどこした改変箇所を中心に見ていく。独特のものがある。

借用また借用

呉禱漢訳をもとにして戯曲に書き換える。つまり底本を借用しての作業である。また、新劇にしたわけではない。伝統劇の枠組みも借用した。借用の2乗になる。

恩義と友情を主題とするのは動かない。戯劇は言うまでもなく実際に出演者が登場して演技する。役者のために台詞と歌詞に書き換える必要がある。天室宮人はその際にいくつか的部分的な変更を加えた。その目的は戯劇全体をひとつのある結末に導くためだ。いわば第2主題である。あらかじめ言っておくと反乱の結末だ。

「義侠記」は「改良戯劇」と称する。伝統劇から新劇への過渡期に書かれた。なにしろ舞台はジャマイカ島だ。呉禱漢訳『侠黒奴』の読者ならば主要人物のシーザー、クララ、ヘクター、エステルらが黒人であることを知っている。登場するのはイギリス人と奴隷の全員が外国人のみ。戯劇の内容はまったく新しいものにならないをえない。

それぞれの役柄と説明を原文を引いてそこから抜き出す。

愛徳華(エドワーズ) 老生、洋装で白いヒゲ(老生扮西装上白白鬚)

西査(シーザー)、クララ(クララ) 小生と正旦。洋装(小生正旦扮西装挽手同上生唱)

仇狼特(デュラント) 浄、桃色の顔に洋装で短いヒゲ(浄粉面西妝[装]上短鬚)

郝斐里(ジェフリーズ) 丑(丑白)

海克道(ヘクター) 浄、黒い顔に洋装で長いヒゲ(浄黒面西妝[装]上大鬚)

威斯薩(エステル) 老旦、洋装で手に黄色い旗を持つ(老旦西妝[装]手執黄旗上)

紅葉日記挿絵の奴隷は男女ともに半裸だ。しかし清朝末期の舞台でそのまま演じるわけにはいかない(紅葉日記を見ている前提で言う)。全員が洋装という指定である。シーザーとクララについては黒人だという記述がない。生と旦を割り振ったが顔を黒く化粧させるのか。ヘクターが黒い顔をしているが浄だからそこは自然だ。同じ黒顔だとして、生旦と浄は化粧で区別するのか。そこはわからない。

作中では「黒人奴隷(黒奴)」という単語を挿入している。具体的にどのような顔を作っているのか、上の説明では不足する。かぶり物についても不明。劇中でシーザーは帽子を取るしぐさをする。英文原作の挿絵本、紅葉日記本でもシーザーが帽子をかぶっている図はない。一方でイギリス人は帽子をかぶる。「義侠記」だけが例外で違和感が残る。また洋装で伝統劇の付けヒゲだとすれば合わないと思う。登場人物の扮装全体が不鮮明である。

ただ「改良戯劇」と称するのだから上演者に裁量の自由があるだろう。いかような変更にも適応できる。そうなると実際に上演されるとすればどんな状況になるのか予想がつかない。実際に上演されたどうかは不明にしてもだ。

伝統劇の枠組みを使用していると書いたが、見れば役柄を振り当てただけ。

天寶宮人は呉禱漢訳が恩義と友情を主題にしていると正確に理解している。人種を超越している。だから奴隷制度については説明しない。イギリスの三角奴隷貿易についても口を閉じている。「黒奴」「黒種」「白人」を使い両者の対立は残している。そこは呉禱漢訳(すなわち紅葉日訳)の大筋を基本的に継続する。ただし部分的にだが重要な変更をいくつか加えた。冒頭からそれが出現している。

亡国貧民という設定

最初にイギリス人エドワーズが登場して全体の状況を説明する場面だ。

【義侠記】俺愛德華 奉英主命令 在西印度 哲美加島 管理殖民事務 想来世界上 許多亡国窮民 作了俺家奴隸 何等可憐 俺不能個個救他出於水火之中 惟有格外憫憐他們才是 所以減輕勞苦工作 加些厚重工資 寬些向來的酷例 使他們快樂快樂 方盡俺一番心義 祇恨鄰家把這些黑奴 百般凌虐 又有仇狼特那賊 忍心害理 助紂為虐 同是一樣人類 偏不能伸天賦人權 做了強賊 砧上之肉 思量好不傷慘 1頁

私エドワーズはイギリスの主人からの命令で西インドのジャマイカ島において植民事務を管理している。世界の多くの亡国貧民が私の奴隷になって、なんと痛ましいことだと思う。私は個々を災難から救い出すことはできない。ただ彼らにことのほか同情するのである。だから労苦を軽減し、いくらか手厚い報酬を与えて、今までの残忍な例をいくらか緩め、彼らを少しばかり楽しくさせたい。それで私の気持ちを尽くすだけだ。ジェフリーズが黒人奴隷をあれやこれやと虐待するのを憎む。またデュラントという悪党が大層むごく、主人を助けて悪事を行なっている。(奴隷たちは)同じ人間であるにもかかわらず、ただどうにも

天賦の人權を伸ばすことができずに強盗の餌食(まな板の上の肉)になっている。

農園の管理者というのが原作では農園主だ。ここで穏健派エドワーズの考えを紹介している。「私は個々を災難から救い出すことはできない」と述べて奴隷制度をなくする意志はもたらないことを明らかにする。彼ら奴隷の負担を軽減する努力をしている云々。呉禱漢訳を踏まえてそのままだ。

ただし異なる箇所がある。奴隷となっているのは滅亡した国の貧民(亡国窮民)だと説明する。アフリカから連れてこられた人々だとは記述しない。亡国はシーザー、クララ、ヘクターの台詞にも見える。

次はシーザーとクララがふたりして掛け合っ
て歌う場面だ。

【シーザー】恨当年吾祖国政教不振 2頁

俺が悔やむのは、以前わが祖国は政治宗教が不振だったことだ。

【クララ】主權落民心散外侮欺凌

主權はなくなり民心はばらばら、外国からは侮られ虐げられた。

【シーザー】只可惜錦江山送人管領

残念なことに麗しい山河は人に管理されるところとなった。

【クララ】把一個主人翁反作殖民

主人公を逆に移住民にしてしまった。

シーザーが台詞に切り替えてさらに語り継ぐ。

【シーザー】妻呀 想起我們祖国 当初何曾不是一個強國 只恨我們國民 沒有國家思想 把天賦人權 旁落在貪狼政府 一座錦繡江山 斷送在他們手裏 弄的國破家亡 到了今日 與人家為奴作隸 可慘呀 可慘 2-3頁

妻よ。われらが祖国を思えばかつては強

国ではなかったか。ただわれら国民に国家思想がなく天賦の人権を無慈悲強欲な政府へ向けて投げ捨ててしまった。麗しい山河を彼らに与えて、国は破れ一家は離散するという結果だ。今では人の奴隷となっている。これはあまりにも酷くむごたらしい。

ここにはどこにもアフリカと関係する箇所がない。天宝宮人はふたりが奴隷になった原因を国が減んだせいに変更した。

シーザーの親友ヘクターの台詞にもそれが出てくる。

【ヘクター】俺 海克道 可嘆祖国滅亡
 群生顛沛 流落哲美加島 作人奴隷 8頁
 俺ヘクターは嘆くのだ。祖国が減亡して皆は窮してジャマイカ島に流れ着き、他人の奴隷になってしまった。

天宝宮人は戯曲の根底に「祖国滅亡」「亡国」を設定した。

ヘクターがシーザーに向かって蜂起に参加するように要請する場面にも出現する。「蜂起して悪人を殺して報復するのだ。お前が心をひとつにして共に国の恥をそそぐように願っている(起義殺賊報仇 還望賢弟努力同心共雪国恥)」(12頁)。ここにも祖国を出している。残忍なジェフリーズの台詞にも「亡国之民」(22頁)とある。また蜂起する人々を指して「亡命党」(31頁)とも呼ぶ。

祖国が減亡して他人の奴隷になる。勝者と敗者の関係だと設定している。必ずしも黒人と白人の人種対決でなくてもよい。その中身はどのようにも読み替えることが可能である。異民族でも複数国家でもかまわない。民族対立と考えれば清朝末期の実態に合わせて主人が満洲族で奴隷は漢族という関係も成立しうる。「改良戯劇」だから解釈の余地があるという意味だ。

シーザー夫妻は感謝する

話を物語の最初にもどす。

残忍なデュラントは奴隷のシーザーとクララを他所へ売ろうとしていた。通りかかった農園主で穏健派のエドワーズがふたりを5千フラン(仏郎。7頁)を支払って買い取った。当時はイギリスの植民地だから通貨はポンドだろう。そうしなかった理由は不明。呉構漢訳に具体的な金額はない。天宝宮人の加筆だ。シーザー夫妻はエドワーズに救われたことを感謝し恩義を深く感じた。「感謝する黒人 THE GRATEFUL NEGRO」はエッジワース原作の題名になっている。

シーザーの親友ヘクターは残忍なジェフリーズ、デュラントからの虐待に耐え切れず同胞を集めて反乱蜂起することに決める。彼は魔術師エスターの指導を受けて同胞をまとめた。白人を皆殺しにする計画だ。

シーザーはそれを知って嬉しく感じると同時に悲しむ。白人を駆逐するのは天理だ。しかし自分たち夫婦を救い出してくれた恩人エドワーズに対しては恩に報いると定めている。また仲間に入らないとヘクターとの友情を失うことになる。どちらを取ればいいのか。

シーザーはヘクターを説得しようとした。恩人のエドワーズだけは助けてほしいと懇願する。ヘクターはシーザーを殺したかった。そうしなかったのはシーザーが義のために殺されたとかえって名誉を得てしまうからだ(15頁)。ヘクターは別の方法を考えた。魔術師エスターに依頼してクララに魔法をかけてもらう。クララからシーザーに反乱集団に入るように言わせた。

シーザーは以前から決心している。恩義のためには死ぬ覚悟だ。友情のためには身をささげる。シーザーは恩義と友情の板挟みになり大きく深く苦悩する。ここは呉構漢訳(すなわち紅葉日訳)を遵守する。

いくつかの改変——変化するクララなど

天寶宮人が細かく変更した個所を見る。

呉禱漢訳ではシーザー（コロマンティン族）は妻のクララに死んでくれるかと尋ねた。クララは死ぬと答えた（シーザー「死んでくれるか。（「情願死嗎」。クララ「立派に死ぬよ。（「死了強得多」）。エッジワース原作ではクララはエボエ族でもとから心優しく内気な人物として作られている。「立派に死ぬよ」などと答えるはずがない。それを紅葉が部族の違いを無視して彼女を改変した。呉禱はそのまますを漢訳している。

改良戯劇ではさらに書き換えた。クララの方から死ぬと積極的に言い出す。

【クララ】豈可忘了大恩 17頁

どうして大恩を忘れることができましょ
う。

【シーザー】是呀

そうだ。

【クララ】情願一死 報答恩人

死にましよう。恩返しをましよう。

【シーザー】賢妻怎講

賢妻よ、何を言う。

【クララ】情願一死報答恩人

死んで恩返しをするのです。

【シーザー】克拉拉君 不愧女中豪傑 不
愧俺西查之妻 俺夫妻立定方針 捨身救主
17-18頁

クララよ。さすがに女の中の豪傑だ。さ
すがにシーザーの妻だ。俺ら夫婦は考えを
決めて主を救うために身を捨てよう。

呉禱漢訳よりもさらに強い妻になった。捨て
身のクララという天寶宮人による変更は終幕の
伏線として機能する。エッジワース原作はもと
より紅葉日記（呉禱漢訳）にも存在しない意外
な結末をここで予告している。

そこにいたる直前に呉禱漢訳にはない場面を

増設する。

反乱集団が蜂起の日時を確認したあとのこと
だ。黒人奴隷男女10名が酒瓶を持って登場して
歌う。夜時間を示す一更一点から五更五点を使
用した数え歌である。冒頭のみ示す。

【義俠記】一更一点月東升 好不光明 呬
呀呀得呬 好不光明 風来吹滿一天雲 遮
住清明 呬呀呀得呬 最惨是国民 第7折。

33頁

ひとつとせ 月が東に昇り なんと明る
い イヤヤトイ なんと明るい 風が満天
の雲を吹き寄せ 明るさを遮って イヤヤ
トイ 最も憐れなのは国民だ

同様に二更二点は国が亡びた。三更三点は英
雄が毒虫を殺しつくすぞ。四更四点は武器を準
備し終わって砲火は一斉に鳴りわたるぞ。五更
五点は戦いによって敵を殺しつくして黒人に栄
光あれ、である。蜂起を直前にひかえて気炎を
あげその成功を祈願する目的の合唱だ。革命歌
そのものにしか見えない。

もうひとつの加筆はジェフリーズ夫妻に男女
の子供があるとしたことだ。その子供たちをロ
ンドンに学ばせに行かせるというのも天寶宮人
の改変加筆である（34頁）。ジェフリーズ一家
の平穩さと未来への希望を強調する。一家は歌
声を遠くに聞いて黒人たちが月明りに感動して
歌っていると考えた。まさか蜂起の合唱だとは
思いもしない。反乱が起きる直前の静けさとい
うわけだ。戯劇らしい緩急をつけてそのまま最
後の山場につなげる。

結 末

天寶宮人はヘクターらの反乱集団とデュラン
トらが闘う場面を追加した（第8折）。役者多
数が登場して武闘をくりひろげる。観客が喜ぶ
ように上演時の効果をねらった。

デュラントは捉えられて殺される。残忍なジ

エフリーズ夫妻は逃亡した。ここは原作どおり。シーザーはエドワーズ一家を連れてヘクターと対決する。恩人を救って恩返しするのか。ヘクターとの友情を大事にするのか。二者択一を突きつける。天宝宮人はその最高潮へと導くように書き直した。

白人は敵だ、殺さねばならぬとヘクターは主張する。シーザーは恩人を裏切るとは畜生道に墮ちることだと反論する(40頁)。

【シーザー】 唉 不救主人 是為不忠 違背友道 是為不義 這不忠不義之人 俺西查寧死不為 唉 事到其間 還有什麼再說 拚將這一條性命 答報主公 一腔熱血 洒向同胞罷了 40頁

ああ、主人を救わなければ不忠になる。友情に背けば不義になる。俺シーザーはそのような不忠不義の人間には死んでもならないぞ。ああ、こうなったからには何をいうことがあるのか。このひとつの命を投げ捨て主人に報いよう。いっぱい熱血を同胞に向けてまき散らしてやる。

ト書きに「用刀自刎(ナイフで自分の首を刎ねる)」(40頁)とある。また周囲の者が台詞で「西查自刎(シーザーが自分の首を刎ねた)」という。

「不忠不義の人間には死んでもならない」とは恩義と友情を両立させるという意味だ。それを実現するために全員の目前で自刎してしまう。エッジワース原作、紅葉日訳(呉構漢訳)にも存在しない結末となった。

シーザーは自殺をした。エドワーズ一家はシーザーの犠牲によって命拾いしロンドン行きの船に乗った(41頁)。

エッジワース原作ではシーザーはヘクターに刺されはするが死なずに回復した。紅葉日訳ではそれを変更してそのまま死なせてしまう。それを戯劇の天宝宮人は自殺へとさらに書き換え

た。いかにも改編者天宝宮人の独創のように見えるがそうではない。この発想は呉構漢訳がすでに提供していた。改編者はそれを利用したにすぎない。

呉構漢訳の次の個所にある。ヘクターに答えたシーザーの発言である(波下線は筆者)。

【呉構】海克道啊。那没情没理的事。須幹不得。還不如殺殺我。前去幫助我那家主人。你若不允。我也能自己取下我的首級来。19頁

ヘクトルよ、情理のないことはどうしてもできないというなら俺を殺してくれ。そうして俺のあの主人一家を助けてくれ。それがだめというなら俺は自分の首を取ることもできるんだ。

もとになる紅葉日訳は「志いざあの首を取つてくんねえ」である。「さあ、殺せ」と催促したのだ。呉構は日本語の「首」「取」を手がかりにして波下線のように誤訳した。天宝宮人はその誤訳にもとづき前後の辻褄を合わせて実現させたのだ。

一方のクララである。天宝宮人によってクララは積極性を持たせられ捨て身になっていた。その伏線が最後に回収される。

【クララ】為報恩奴従夫假誓盟心 今日裏幸保全恩公生命 縦死在九泉下瞑目甘心 叩頭起望海水將跳去 41頁

恩に報いるために私は夫と誓って約束したのです。本日は幸いに恩人の命を守りました。たとえ死んでもあの世で安らかに満足します。叩頭してから海に飛び込みましょう。

それを目の当たりにしたエドワーズ夫妻が泣く。

【エドワーズ】西査報恩方自刎 41頁
シーザーは恩に報じて自分の首を刎ねたところだ。

【エドワーズ妻】クララ殉義又捐軀
クララも義に殉じて身体をささげました。

恩義と友情に引き裂かれたシーザーは自殺した。受動と積極の違いはあるにしても結果として死亡したことは紅葉日記を踏まえる。ただし改良戯劇では意外な変更が加えられた。原作でも紅葉日記(呉構漢訳)でもクララは生きている。ところがこちらは天室宮人によって入水自殺させられてしまった。

まとめ

主要登場人物についてその生死を一覧表にする。a エッジワース原作、b 紅葉日記(呉構漢訳)および c 改良戯劇の順である。記号の意味は次のとおり。○生存、△逃亡、×死去、?不明。

人物と物語に分けてまとめる。

	a 原作	b 紅葉・呉構	c 改良戯劇
1 エドワーズ	○	○	△
2 シーザー	○	×	×自刎
3 クララ	○	○	×入水自殺
4 ヘクター	△?	△?	○
5 ジェフリーズ	△	△	△
6 デュラント	×	×	×

原作で 2 シーザーはヘクターに刺されたが蘇生した(○)。紅葉(呉構)はそれを恩人エドワーズをかばって死んだことに改変した(×)。改良戯劇ではさらに変更して自殺させてしまった(×自刎)。

3 クララは原作と紅葉(呉構)では生き残っている(○)。改良戯劇では自殺させてしまった(×入水自殺)。

4 ヘクターは原作と紅葉(呉構)では言及が

ない。たぶん逃亡したのだろう(△?)。しかし改良戯劇では明らかに勝利者である(○)。

変わらないのは以下の2名だ。5 ジェフリーズはイギリスへ逃亡した(△)。6 デュラントは殺害された(×)。

原作と紅葉(呉構)では 1 エドワーズは反乱集団を鎮圧する。ジャマイカ島はもとの奴隷農園が存続することを意味している。ところが改良戯劇ではエドワーズ一家もイギリスへ逃亡させてしまう(△)。奴隷制度の消滅を暗示する。

abc の3者とも恩義と友情を主題にしていることは共通する。しかし登場人物の生死結末が以上のように3様だ。それにより結末が大きく異なった。

物語の結末を見ればそれぞれの変更点が明確になる。

a エッジワース原作ではシーザーもエドワーズも生きた。反乱は鎮圧されて平常を取り戻した。ヘクターらの蜂起は挫折する。逃亡奴隷となったと推測される。

b 紅葉(呉構)ではシーザーが殺されて原作の世界が崩壊した。しかしここでもヘクターの反乱は失敗している。

c 改良戯劇では残忍な農園主ジェフリーズばかりでなく穏健派の農園主ジェフリーズまでもイギリスへ逃亡した。主要人物のうち生き残ってジャマイカ島にいるのは反乱主ヘクターと同胞たちだけだ。つまり黒人奴隷の反乱が成功した。ここがエッジワース原作および紅葉日記(呉構漢訳)とは決定的に異なる。

視点の移動

恩義と友情が主題であることは違いない。しかし改良戯劇ではもうひとつの主題が設定されている。反乱の成就だ。原作、底本にはもとから存在しない。

視点をヘクターに移動すれば天室宮人の意図が明白になる。

ヘクターは反乱を計画している。農園の白人を殺しつくすことが目的だ。彼からみればシーザーは親友だけに邪魔な存在だった。白人に救済されたことを理由にしてエドワーズに感謝し彼ら一家を強く擁護する。自分の命にかえても彼らの生命を救いたいという。だから反乱に参加しようとはしない。魔術師エステーの術も説得も効果がなかった。その反対者の彼が自殺したのだ。ヘクターが自ら手を下したわけではない。同胞を殺害したことにはならないのが重要である。さらにシーザーの妻も後を追った。それを見たエドワーズ夫妻は自らイギリス行きの船に乗って逃亡した。ヘクターにとって結果的に敵対者の全員を排除できたことになる。原作、紅葉日訳(呉禱漢訳)では反乱を鎮圧したのはエドワーズだった。その彼が逃亡している。こうしてヘクターの反乱は大成した。革命成功である。

この反乱集団の視点に立つ遂行経過は天宝宮人が最初から設定していたからできたことだ。

改良戯劇では反乱集団が異民族の支配者を島から追放する。その結末と清末に書かれたことをあわせ考えると清朝政府に対する反乱革命劇だと容易に理解できる。

官憲から目をつけられたばあいの言い訳は用意されている。黒人とイギリス人の争いであって現実の清朝政府とは何の関係もない、である。

観客の反応はどのようであったのか知りたいと思う。しかし実際に上演されかどうかはわからない。

そのかわりに楊世驥『文苑談往』(上海・中華書局1945.4/1946.8再版(影印本))所収の説明「戯曲的更新」から関連部分を紹介する。

改良戯劇の主題について「黒人ヘクターがその主人シーザーのために復讐することを述べる(叙黒人海君為其主西查復仇事)」(62頁)と記述している。シーザーはヘクターの親友であって主人ではない。楊世驥の勘違いだ。

蜂起直前の合唱についてその歌詞全文を引用

している。『月月小説』あるいは群学社本を手元においていることがわかる。その合唱の曲調は滑稽なものだから悲劇の情緒に合わないという。楊世驥はシーザーが自刎シクララが入水した個所に注目して全体を悲劇ととらえている(悲劇の情緒。62、63頁)。それは主題の片方にすぎない。次の説明が興味深い。

裏面暴露黒人受虐待的痛苦、頗有暗示国人努力自強之意、這種嶄新的題材、在中国劇壇上還是第一次發現。62頁

中で黒人が虐待される苦痛を暴露しているのは、我が国民が向上して努力するようにとの意味を強く暗示している。このような斬新な題材は中国戯劇界では初めて出現した。

黒人が主人公で恩義と友情の板挟みになり最後は自殺してしまう。それを含めて黒人が虐待によって苦しんでいる。そこから自己強化に努力せよとの暗示を読み取った。楊世驥から見ればこれが「斬新な題材(這種嶄新的題材)」なのだった。第2主題である反乱革命の存在に気づくのにあと一歩というところだ。ヘクターに視線を移すという考えは持たなかったらしい。不思議に思う。

崔琦「晚清白話翻譯文体与文化身份的建構——以吳禱漢訳《俠黒奴》為中心」(『中国現代文学研究叢刊』2014年第3期(総第176期)2014.3.15)がある。その中の「九 <義俠記> 对<俠黒奴>的再次改写」に注目する。

天宝宮人「義俠記」の主題を「国権の回復を主張し、個人英雄主義を賛美する天宝宮人の改良戯劇(主張恢復国権、賛揚個人英雄主義的天宝宮人改良戯劇)」(40頁)とまとめた。その根拠はヘクターの造形だ。改良戯劇において「ヘクターは国家を心配し個人の安全は顧みない個人英雄主義の形象に改造された」(39頁)ことを根拠にする。主役がシーザーではなくヘ

ンデルセン ((丹麥) 安德生) 作「皇帝の新しい衣裳 (皇帝之新衣)」だと明記する。以下のとおり。

是篇為丹麥物語大家安德生氏 (一八〇五至一八七五) 原著。名曰『皇帝之新衣』。陳義甚高。措詞詼詼。日人曾節取其意。製為喜劇。名曰『新衣』。大致謂某伯爵崇拜歐人。致貽裸體之笑柄。今兼取安氏原文及日人劇本之義。復參以我國習俗。為洋迷痛下針砭。但求不失其真。非敢以推陳出新自詡也。

本作はデンマークの物語大家アンデルセン氏 (1805-1875) の原作である。題名を「皇帝の新しい衣裳」という。その意味は深く表現は滑稽だ。日本人がかつてその意味を抜き出して喜劇を作り「新しい衣裳 (新衣)」と名付けた。そのおおよそは、ある伯爵が西洋人を崇拜して裸にされるという笑いぐさである。今、アンデルセン氏の原文と日本人脚本から一部を抜き出し、さらに我が国の習俗を参考にして西洋崇拜者の誤りを厳しく指摘する。真実を失わないようにと求めているだけである。古いものの精華を生かし新しいものを創造したと自慢しようというわけではない。

劉半農が該作を書いたおおよその経緯がわかる。

アンデルセン原著という。しかしそれはデンマーク語ではないだろう。半農はコナン・ドイルのホームズもの、あるいはロシア作品の漢訳でも知られている。アンデルセン原作も読んだのは英語訳だと思われる。興味深いのは、日本人の書いた喜劇が別にあるということだ。

ひとつ。半農は「洋迷小影」の底本に使用した英訳も日本喜劇も明記しない*1。アンデルセン原作というだけ。その彼がこれより4年後には北京大学教授として自分の所業を棚に上げる。林紓が『吟辺燕語』でラム姉弟の名前を出

さずにシェイクスピア原著と書いた。半農はそこをつかむ。「林紓は戯曲を小説にかえて翻訳した」と批判したのだ。半農が錢玄同 (偽名は王敬軒) と演じた「なれあいの芝居」のなかに出てくる。後の有名な「林紓は戯曲と小説の区別がつかない論」である。半農は底本がラムの小説本であることを知っていて知らぬ顔をした確信犯である。研究者としての半農は致命的な論理不一致を露呈している。だが林紓批判は政治運動だから半農は気にしなかっただろう。

いくつかの疑問——「洋迷小影」の意味

アンデルセン原作の日本語喜劇「新衣」があると説明する。この箇所ですみずく。日本語訳の「裸の王様」は多数ある。しかし喜劇だという。原作の内容からすればそうなる。おまけに半農の見ることでできた脚本という限定がつく。意想外だから急には思いつかない。今までの研究が半農の説明を引用するだけで停止している理由である。日本の戯曲までは手が回らなかった。

半農はアンデルセン原作を指して『皇帝之新衣』という。さらに日本喜劇の題名が『新衣』だ。「新衣」が共通している。何か意味があると思う。

読めば半農が書いている日本喜劇の内容は不思議なものだ。

まず「伯爵」が奇妙である。「崇拜欧人 (西洋人を崇拜する)」伯爵とはなにか。日本の喜劇はそう設定されていると半農は述べる。伯爵はもともとヨーロッパの制度だ。日本で伯爵がいた時代もあったがどこか合わない。日本語の別単語を「伯爵」に置き換えたのか。ただ先走っていえば「伯爵」と日本の「大名」は違うだろう。

「西洋人を崇拜する」日本人が裸にされて笑いものになるという。だがそのような日本喜劇は見当たらない。可能性のある喜劇では日本人を騙すのは日本人だ。別の戯劇があるのであれ

ばご教示いただけるとうれしい。

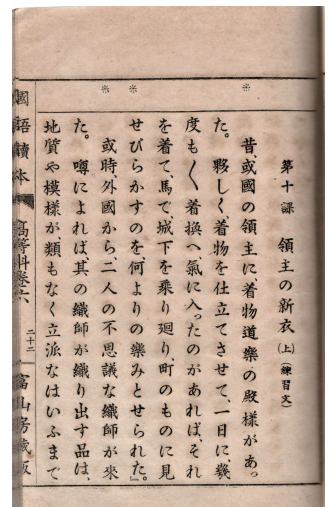
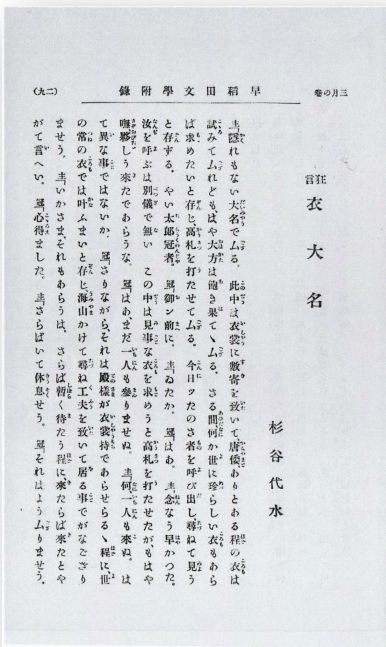
「新衣」という喜劇がまず見つからない。考えるに半農は自分が行なった改変を日本の喜劇と意図的に混同して説明している。あるいは、彼は日本喜劇を探索しにくい方向にむけて説明しているのではないかと思う。どのみち半農の作品全体が翻案だからどのようにも書くことができる。

「洋迷」は西洋を崇拝し熱狂的に愛する人を指す。「洋迷小影」は「西洋かぶれの肖像」という意味に取っておく。

アンデルセン原作は王様が詐欺師にだまされる話だ。ありもしない衣裳を見えると見栄をはる愚かさを笑う。その舞台を半農は中国に置き換えた。さらに西洋人崇拝批判に結びつけて西洋かぶれを批判する。大きな変更だ。改編者には改変の自由があるということでもある。

半農のいう日本喜劇とは——坪内逍遙と杉谷代水

前述のとおり「新衣」という日本の喜劇は見つからない。しかし似た狂言ならある。杉谷代水「(狂言) 衣大名」(『早稲田文学』明治39年3月の巻 1906.3.1。国立国会図書館所蔵)である。



冒頭と挿絵

のちに杉谷恵美子編『杉谷代水選集』(富山房 1935.11.12)に収録された。

杉谷代水(本名虎蔵、1874-1915)。詩人、劇作家。富山房に入社、坪内逍遙『国語読本』の編集制作にたざさわった*2。彼の翻訳にはエドモンド・デ・アミーチス EDMONDO DE AMICIS 作『クオレ CUORE』(1878)の『(教育小説) 学童日誌』(春陽堂 1902)、シェークスピア『沙翁物語』(富山房1903.3.11)、ジェームス・ボールドキン『希臘神話』(富山房1909.5)また『新訳アラビヤナイト』上下巻(富山房1915.12.13、1916.2.11)などがある。

代水は逍遙『国語読本』を編集した。その内実は編集にとどまらずかなり積極的な役割をはたしたらしい。教材を起稿下書きしたという*3。

そこに収録されているのが「領主の新衣」(『国語読本(高等小学校用)』巻6 富山房 1900.10.2/1901.8.23訂正四版)である。これこそアンデルセン原作だ。代水が英訳にもとづいて「領主の新衣」を作ったとしても不思議ではない。「領主」だから日本の大名だ。挿絵部分を掲げる。

その大名から後の狂言「衣大名」につながるのは自然である(後述)。

それだけに終わらない。島村抱月、逍遙らが新劇運動の母体である文芸協会を設立した。その発会式(1906)において狂言「衣大名」が上演されている*4。

以上の時間的流れを見る。逍遙『国語読本』の「領主の新衣」掲載から代水の狂言「衣大名」が生まれ、逍遙が関係する文芸協会での上演だ。一本の線で結ばれている。いずれも代水と逍遙の関係があることは明らかだろう。

ついでに言えば半農が提出したアンデルセン原作は『皇帝之新衣』だし日本喜劇は『新衣』だ。逍遙の「領主の新衣」とも「新衣」で重複する。さらに代水の「衣大名」を加える。「衣大名」を『新衣』と間違ったのではないか。半農の記憶に混乱があると推測する。

狂言は日本の古典的喜劇だ。半農の説明と矛盾しない。アンデルセン原作で日本の喜劇といえば現在のところ代水「衣大名」しか出てこない。日本では実際に上演されており知られた狂言とっていいようだ。

冒頭部分の比較検討

半農「洋迷小影」の主人公は外国留学帰りの若様だ。ふたりの外国人詐欺師がやってきて新発明の織物を織るといふ。悪人には見えないという特徴がある。それによって人となりの善悪を判別することができるの謳い文句だ。家来たちも素晴らしい衣裳だと絶賛する。若様は織りあがり縫製された衣裳を身に着け妻と自動車に乗って外に出かけた。見物人も悪人になりたくはないから見えない衣服をほめそやす。児童のひとりが若様は裸だと叫ぶ。見物人も気がつき罵った。若様は誤りを認めるどころか、お前たちはみんな悪人だから見るができないのだと言った。

アンデルセン原作とは異なる個所がある。主人公は若様で留学帰りの中国人に変更される。それに着道楽ではなくただの舶来品好きだ。時代は自動車が出てくるから現代である。しかし

自動車に乗って裸であることが外から見えにくだろう。ゆっくりと徒歩で行進してこそ裸である事実が明白になる。半農による改悪でしかない。

若様を騙す詐欺師が外国人だ。外国人が中国人をペテンにかけると書き換えた。もとの王様、皇帝を若様に地位を降下させている。地方有力者の息子にしか見えない。若様は最後まで事実気づかないままだったのかどうかは曖昧にする。そのほかはアンデルセン原作の大筋をほぼ踏襲している。基本が同じで細部が異なるから翻案ということになる。

つぎに半農「洋迷小影」と代水「衣大名」(ルビ省略)初出の冒頭から引用する(「衣大名」は雑誌初出と後刷りでは字句が異なる箇所がある)。

【半農】某公子自海外遊学帰来。学問高低。可不必論。却是滴身都沾了羊騷臭。什麼穿的吃的用的。以及一切与他接触的東西。沒一樣不是洋貨。連便壺馬桶。也是西洋舶来品。恨不能連自己的身体。也要用蓮花化身法。化成西洋的種子。人家都說他是洋迷。实在爽爽快快說起来。簡直是洋貨的奴隸。1頁

ある若様が海外遊学から帰ってきた。学問の優劣は論じるまでもない。ただし全身が羊(洋と同音。外国の意)臭にまみれている。着るもの、食べるもの、使用するもの、すべて彼が触れるものは何でも外国製品でないものはない。尿瓶、便器などにいたるまで西洋の舶来品である。残念なのは自分の身体も蓮花化身法(明代小説の蓮花から化身する方法)によって外国人種になりたいところだがそれができない事だった。みなは彼が西洋かぶれだと言ったが、実のところはつきりいえば単なる舶来品の奴隸である。

【代水】主「隠れもない大名でム(ごぎ)

る。此中は衣裳に数寄を致いて、唐倭、ありとある程の衣は試みてムれども、はや大方は飽き果てゝムる。さる間、何か世に珍しい衣もあらば求めたいと存じ、高札を打たせてムる。今日ツたのさ者呼び出し、尋ねて見うと存ずる。やい太郎冠者。冠「御ン前に。(後略) 29頁

代水狂言の文末には「作者附記」がある。原作については次のとおり。「此作ハンス、アンデルゼンの寓意譚に基きて綴る」(38頁)。原作の王様は代水によって着物道楽の大名に書き換えられた。こちらの詐欺師は日本一の織物師だと申し出てくる。名を「漢服部(あやはとり)」という。「はとり」とは「はたおり」のこと。もとは漢から渡来した綾織工を意味する。狂言名は「衣大名」だがその内容は「裸の殿様」である。

両者は一見してまったく異なる書き出しだ。それもそのはず、半農は小説体だし代水は狂言体である。一致するほうがおかしい。

それでは半農が前言でわざわざ日本喜劇に言及した理由はなにか。別の言いかたをすれば、半農は代水狂言のどこに触発されたのか。

衣裳の色合いと模様

アンデルセン原作では詐欺師の織り出す衣裳の色と柄については簡単な説明しかない。参考までに大畑末吉訳「皇帝の新しい着物」*5を添える。

Ikke alene farverne og mønstret var noget usædvanligt smukt,

【大畑】その織り物はただ、色や柄が、なんととも言えず美しいばかりでなく、 158頁

言っているのは色合いと模様だけ。それ以上の詳しい描写はない。

参考までにアンデルセン原作の英訳を見る。多いから1例を示して残りは注釈に回す*6。

○英訳者不記“FAIRY TALES.” NEW YORK: R. WORTHINGTON, PUBLISHER. 1884/open library 所収 the two rogues (詐欺師) “the pattern very pretty and the colors brilliant” p.300

英訳でも「模様はとても美しく色合いは鮮やかだ」と簡潔だ。細かい説明はないことに注目する。

日本語翻訳も同様にして掲げる(主として国立国会図書館デジタルコレクション所収)*7。

○ハンス、クリスチヤン、アンダーセン作、渡辺松茂訳「第21課 帝ノ新ナル衣服」『ニューナショナル第五リーダー直訳』積善館 1888.6.13

「光沢アル色及ビ清浄ナル企図」82頁

日訳も英訳とほぼ同じく模様と色合いのふたつだけを述べていることがわかる。直訳ならばそうなるだろう。

ところが代水「衣大名」だけはそれらとは異なる。衣裳に織り込んだ模様を具体的に説明する。

「衣大名」初出より関連箇所を複数引用する。

【代水】先づ地は春の野の薄緑でムる。子の日の小松を松の丸に織り出し、白茶の霞に雲井の鶴は何とムらう。33頁

春の野の浅緑に子の日の鶴と申してムる。33頁

春の野の浅緑、子の日の松に雲井の鶴のあたりは、34頁

さて夏山の深翠に時鳥、秋の田の面の鴈金、冬の海辺の村千鳥と、斯様に大方織り成いてムるが、34頁

田の面の雁、友呼ぶ千鳥の声々まで、耳に聞こゆるやうにおりやる。34頁

「春の野」「松」「雲井の鶴(カキツバタ)」「時鳥(ほととぎす)」「鴈金(かりがね)」「千鳥(ちどり)」など多様な図柄を展開している。実際には存在しない意匠だから詐欺師は自由にいい換えることができる。

模様を詳しく描写する萌芽は逍遙「領主の新衣」に存在する。一部のくり返し記号は文字に直してすなわち「織師は、尚ほも、機を指し、こゝの模様がしかじか、そこの色合がしかじかと自慢して、説明する」(23丁ウ)という個所だ。「しかじか」部分をふくらませ具体的に記述すれば上の狂言になる。「領主の新衣」に代水が深くかかわっていたからこそ狂言で加筆できた。その可能性が高い。

半農の「洋迷小影」も絵柄は違うが記述は同様に詳しい。詐欺師のひとりが説明する。

【半農】這種織物的花紋与顔色。能隨時變化。比方眼前有牡丹花。織物上就現出牡丹花。有玫瑰花。就現出玫瑰花。做了衣服。美麗異常。2頁

この織物の模様と色合いはその時どきに変化いたします。たとえば眼前にボタンの花があれば織物にはボタンの花が現われ、バラの花があればバラの花が現われます。衣裳にすればことのほか美しい。

那外国人曾預先声明。花紋顔色。隨時變化。4頁

あの外国人は先に模様と色合いは時どきに変化すると公言しておった。

こちらは実物の花が衣に映し出されるという。半農独自の工夫がなされている。そこが代水とは異なる。

半農が代水狂言から得たものは描写をそのまま写して漢訳することではない。衣裳の色と柄

をより詳細に提示するという発想そのものだ。半農がわざわざ日本喜劇に言及したのはその発想に触発されたからである。

結 末

アンデルセン原作において、王様は詐欺師に騙されたことに気づく。しかしいまさら行列を中止するわけにはいかない。そのまま強行してしまう。

半農翻案ではそこも書きかえる。代水狂言との違いを見るために最後部分を併記する。

【代水】主「やれ腹立や腹立や。漢服部めに騙られて、日本一の恥をかいた。誰ぞあの大盗人めを捕へてくれい おのれやるまいぞ。ハツクシヨ。(後略) 38頁

【半農】然兒公子到了此時。反不便認錯。仍旧咬定舌根說道。這是西洋新發明的織物。你們都不是好東西。那有看得見的資格呢。5頁

しかしながら若様はこの時になっても間違いを認めどころか、舌をもつれさせて依然として言ったのだった。これは西洋新発明の織物なのだ、お前らは善人ではないのだからどうして見える資格があるか、と。

前出「領主の新衣」(『国語読本』)の最後は「殿も家臣も、今更に、はっと心づき、さては、織師の悪者にだまされたのではないか、と、急ぎ、館へはせ帰って、「織師を呼び出せ。」とのゝしたが、もう遅い。悪者の織師は、とうに逃げ去って、影もなかった」(27丁オ)である。それをもとにして狂言が「誰ぞあの大盗人めを捕へてくれい」となるのは自然な流れだ。

半農の「咬定舌根」は「舌を噛んで」ということだがその理由がある。舌をもつれさせる心理的背景が存在することを示唆する。詐欺師に騙されたことを自分ではうすうす理解したが表

立って言わずにごまかした。

半農は基本的にアンデルセン原作の英訳を底本にして翻案している。ただし織物の細部については代水狂言の描写に刺激を受けた。その発想を借用して彼独自の工夫を加えたのだ。そのことをもって日本人の喜劇に言及した。 罍

【参考文献】

平林広人『アンデルセンの研究』東海大学出版会

1967.12.20

新田義之「杉谷代水と児童文学」村松定孝+上笙一郎

編『日本児童文学研究』三弥井書店1974.10.1

村松定孝「裸の王様」と「衣大名」日本児童文学

学会編『アンデルセン研究』小峰書店1975.10.31

二版

菊地善太「翻案狂言による西欧文学受容」『日本大学

大学院総合社会情報研究科紀要』第15号

2014.7 電字版

【注】

- 1) 別例は樽本「林訳の改編者表記——瀬戸博士の嘘と捏造」(『清末小説から』第140号 2021.1.1)を参照。のち『清末小説四談』(2021.5.1 電字版)所収。
- 2) 『日本近代文学大事典』第2巻、220頁。菊池明執筆。また松下政蔵「杉谷代水の生涯——郷里に於ける代水」(『杉谷代水選集』所収)がある。
- 3) 松下政蔵「杉谷代水の生涯——郷里に於ける代水」に次のようにある。「明治三十年坪内博士は尋常小学校及高等小学校の国語読本編輯に着手せられ、三十三年に完成されたが、材料の配列、指図の工夫、口語文の採用等に苦心せられ、従来英米読本の直訳以上殆んど独自の新味を見なかつた国語読本に、純正なるわが国語教授の新材料を提供し、之を富山房より発行して、小学読本に、一新紀元を劃せられたのであつたが、この編輯に博士を助けて働いた人々は、杉谷、種村、桑田、石原等の諸氏であつたが、主として杉谷虎蔵が博士の意を受けて其のプランを立て、教材を起稿した

のであつた」杉谷恵美子編『杉谷代水選集』富山房1935.11.12。6-7頁

- 4) 代水の「作者附記」より。「文芸協会発会式の当夜、和泉流の名匠高橋彌五郎氏これを演じ、時に本文を離れて自在に遊伎の妙を発揮せられたり。就中太郎冠者の見分役を太郎次郎の両冠者とし、兩人別々の性格を同果に収めたるは一段の工夫なりき。終局の處、大勢を舞台外に退かせ、シテ一人しよんぼりと残りて、小く「ハツクショ」の一結、今も尚ほ目にあり。苦心の功か不用意の妙か、我儕これを知らず。所謂良工の型として後代に伝へらるゝは是等ぞと思ひぬ」
- 5) 大畑末吉『完訳 アンデルセン童話集(一)』岩波文庫1984.5.16改版第1刷/1995.6.5第24冊
- 6) 次のとおり。
 - EDWARD CLODD 訳“FAIRY TALE FROM HANS ANDERSEN” NEW YORK: F. A. STOKES CO. [1895?]/hathi trust 所収
大臣 “What a fine pattern and what colours!” p.342
 - “FAIRY TALES AND STORIES, BY HANS CHRISTIAN ANDERSEN” NEW YORK: THE CENTURY CO., 1900/hathi trust 所収
詐欺師 “the fine pattern and the beautiful colors” p.474
 - EDNA HENRY LEE TURPIN 編“FAIRY TALES BY HANS CHRISTIAN ANDERSEN” NEW YORK: MAYNARD, MERRILL, & CO. 1904/hathi trust 所収
詐欺師 “the colors and the pattern were pretty” p.93
- 7) 次のとおり。
 - アンデルセン原作、在居一士(河野政喜)訳『(諷世奇談) 王様の新衣裳』春祥堂1888.12.19 /『明治文化資料叢書 第9巻 翻訳文学編』風間書房1972.9.15所収。柳田泉解説あり。
「此模様(かた)や色合は如何でござると問かけまして」8頁、「是は綺麗だ、実以て綺麗だ、模様といひ、色合といひ……」10頁
 - 坪内雄三(逍遙)著「領主の新衣」『国語読本(高等小学校用)』巻6 富山房1900.10.2/

1901.8.23訂正四版。架蔵。また阿部正恒『坪内逍遙の国語読本』パジリコ株式会社2006.12.22所収。原本奥付を収録しない。

「地質や模様が、類もなく立派なはいふまでもなく」22オウ

○奈倉次郎・菅野徳助訳「着道楽（文字通りには、王の新衣裳なり）」『小九郎次大九郎次／着道楽』三省堂1907.1.29 青年英文学叢書

「模様が綺麗で（the pattern very pretty）、色が至極美しい（the colours extremely beautiful）」82頁

○木村小舟（定次郎）訳「一七 裸の王様」『教育お伽噺』博文館1908.10.15 家庭百科全書第13編

「オ、之れはどうも綺麗に織れた、色合と云ひ模様といひ、何一つ批難の入れ所がない」161頁

○アンダーセン原著、和田垣博士（謙三）・星野楽天（久成）共訳「第十九 裸体の王様」『教育お伽噺』小川尚栄堂1910.10.13

「縞柄も色合も美しく」107頁

○上田万年訳「二 霞の衣」『安得仙（アンドルセン）家庭物語』鍾美堂1911.4.1

「さて模様が如何にも綺麗で、色合が至極美しいとは思召さぬかなど、尋ねた」34頁

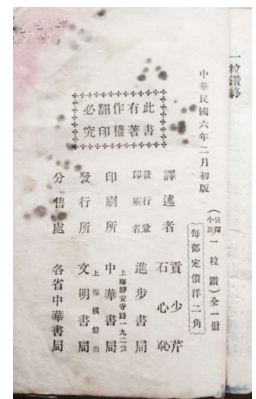
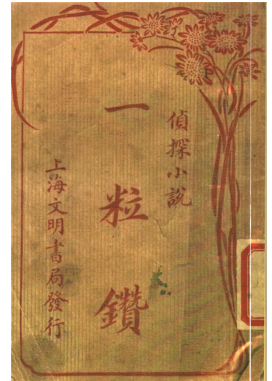
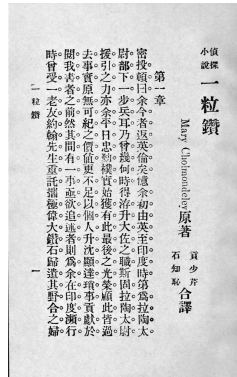
○近藤敏三郎訳「一 皇帝のお召物」『（新訳解説）アンダアゼンお伽噺』精華堂1911.4.18

「何と此の模様は気が利いてみませうが、此の又色合の美しさは他に御座りますまいなど、」5-6頁

貢少芹漢訳『一粒鑽』の原作

沢本郁馬

『（偵探小説）一粒鑽』全18章は本文に Mary Cholmondeley 原著、貢少芹+石知恥合訳の表示がある。私が見ている影印本には奥付がない。孔夫子旧書網の写真を見ればそれが1924年1月再版であることがわかる。初版は上海・文明書局、中華民国六年（1917）二月刊行だ。



次号の公開は2023年7月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

影印本 本文 初版奥付は孔夫子旧書網から

貢少芹漢訳『盗花』——研究者の誤解か？

貢少芹漢訳の1作である。別の1種について説明したことがある。翻訳という点で同じだから簡単に復習しておく。

(英) 莎士比原著、貢少芹訳意『(言情偵探小説) 盗花』(上海・文明書局、中華書局1916.6)という作品だ。上の『一粒鑽』とほとんど同時期に書かれた。こちらは「訳意」だった。本稿であつかう『一粒鑽』の「合訳」と似ているが完全に同じというわけではない。共訳者の名前は出されていない。

原作者の「莎士比」といえば普通に考えてシェイクスピアである。だから「シェイクスピア原著」という表記に研究者、目録作成者のほとんど全員が騙された。「莎士比原著」とあるのを見ただけで林訳批判を条件反射のごとく無意識に適用したのだ。作品は読まずに莎劇を小説化したものと決めつけた。誤解の上塗りをしたというわけ。複数の人が間違った。

『盗花』の本文を読めば英国を舞台にした角書どおりの恋愛探偵小説である。しかも海賊が青年男子を誘拐して展開する物語だ。最後は海賊島を脱出した船上で戦闘が発生する。恋愛があり探偵が出てきて活劇でもある。

結局のところ莎氏あるいは莎劇とはまったく関係がない。私は貢少芹の創作ではないかと疑っている。

なぜ莎氏の名前を出したのか。その必要がないから戸惑う。それとも貢少芹が書く「莎士比」はあの莎氏を意味しないとでもいうのか。そうだとしたらまぎらわしい。それよりも作者不明の恋愛探偵小説を漢訳したという体裁をとっても不思議ではない。貢少芹はあえてそれをしなかった。莎氏の名前にしたほうが注目度は高くなるだろうという目論見か。

中国において莎氏についての知識は当時は少なかった。ラム姉弟『シェイクスピア物語』を底本とした林訳『吟辺燕語』(1904)が比較的好く知られているくらいのものだ。林訳批判

が突如として巻き起こるのは1918年になってからになる。莎劇から直接漢訳した田漢の『哈孟雷特(ハムレット)』(1922年単行本)が出てくる以前でもある。莎氏の作品について詳しく知られているというわけではない。名前だけ聞く莎氏の作品だといえればある程度の販売増を期待できると考えたかもしれない。憶測にとどまる。

貢少芹が莎氏原著とした理由はそれくらいしか思いつかない。読んだ読者は莎氏原作だと本当に信じたのだろうか。莎氏が小説を書いたと思ったとしたら奇妙な話だ。貢少芹が意図した冗談だろう。それが一応の結論だった。冗談といわなくてはならないくらいに莎氏とは離れて遠い作品なのだ。

なお貢少芹訳にはほかに著名な原作者を掲げる作品がある。(法)大仲馬『(偵探小説)盗盗』(1915)、(英)哈葛徳『(奇情偵探小説)秘密女子』(1915。未見)などという。しかし莎士比の例が強い印象を残している。デュマとハガードの表記を真に受けることがむづかしい。実物を見ない限りなんともいえない。

その貢少芹が原作者 Mary Cholmondeley を英文のままに明記する。しかも石知恥という共訳者もあげている。実在の人物かあるいは「実知恥」のもじりかどうかはわからない。莎士比原著『盗花』には共訳者がいなかった。『一粒鑽』はそこが違う。角書に「偵探小説」とあるところが表面的には共通する。

Cholmondeley という作家は本当にいるのか。私には知識がないから確認する必要がある。これが出発点だ。

Cholmondeley について

調べれば Mary Cholmondeley (1859-1925) は実在したイギリスの小説家だった。Cholmondeley はチャムリと読む。

ついでながらイギリスの女性作家ハラデン (Beatrice Harraden 畢脱利士哈拉丁) の原作

を漢訳(訳者不詳)した『海外拾遺』(1908)があった。彼女の原作が漢訳されたのは私が知る限りその1作だけだ。清末の例がハラデンならば民初の唯一例がこのチャムリである(現代中国におけるチャムリについては別稿で述べる)。ふたりとも比較的多くの作品を書いている。しかし中国の読書界では別作品の漢訳を必要としなかったらしい。ただしそれで人気を広まらなかったと考えるのは早計だ。重版はしている。

『中国大百科全書・外国文学』(中国大百科全書出版社1982)、『外国人名辞典』(上海辞書出版社1988)、『外国文学大辞典』(春風文藝出版社1989)などには収録されない名前だ。チャムリの漢訳実例を示せば昔には岑礼また陳孟礼などがある。そういう例があるというだけ。原作者本人を指しているわけではない。ならば無理やり漢訳する必要もない。事実として貢少芹らは原作者名を漢訳していないのだ。

イギリス文学では著名な作家だとわかった。しかし清末民初の翻訳研究では言及がほとんどない。例外といえるのは楊玉峰『南社著訳叙録』(中華書局(香港)有限公司2012.12)だ。本稿の執筆途中で気づいた。楊玉峰はチャムリの漢訳を瑪麗・丘蒙德莉とする。英文をそのまま読んだ。また『一粒鑽』の原作を特定している。筆者が得た結果と偶然に一致する。次に述べる。

『一粒鑽』の原作

チャムリの書いた多数の作品のなかから1作を探ることになる。このばあい手がかりは漢訳題名だ。『一粒鑽』といえばダイヤモンドである。それらしいチャムリの作品はないかと見れば「宝石 Jewels」を使うものがある。

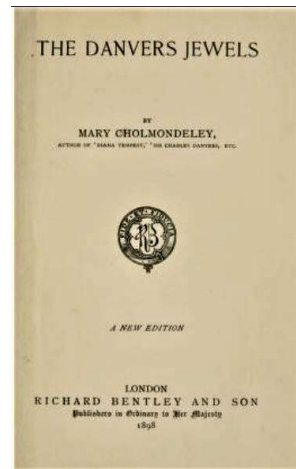
その題名をもとにして調べると少し複雑な状況が出現した。

“The Danvers Jewels and Sir Charles Danvers”と題する書物がどこにも見える。そ

うすると『一粒鑽』の原作はこれかと予測する。長い題名だ。さぐるとふたつの作品が合訂されていることがわかった。

それらはもとの題名と出版の年月が異なる。しかし普通に上記のような合冊本として流布している。

彼女の小説『ダンヴァースの宝石 The Danvers Jewels』は『テンプル・バー Temple Bar』雑誌に掲載された(未見)。1887年には最初の単行本が刊行されている(初版未見)。LONDON: RICHARD BENTLEY AND SON, 1898年版がある。



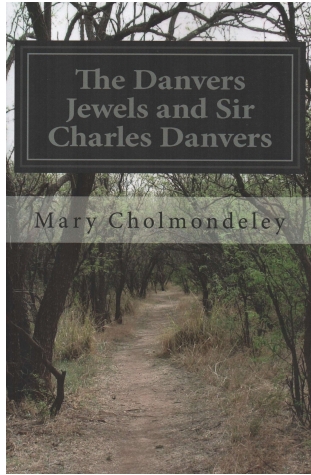
1898年版 ネットから

また LONDON: MACMILLAN AND CO., LIMITED/NEW YORK: THE MACMILLAN COMPANY, 1902 などを見ることが出来る。1898年版は3部に分けて全13章と終章(CONCLUSION.)とで構成される。別版では通して13章と終章だ。1887年といえばコナン・ドイルの『緋色の研究 A Study in Scarlet』が刊行された年である。

継続して『チャールズ・ダンヴァース卿 Sir Charles Danvers』1889年が出た。31章と終章が含まれる。

それらを合本にしたものが上記の書物だ。くり返せば“The Danvers Jewels and Sir Charles Danvers”1890年ニューヨーク版がネット(googlebooksあるいはproject gutenberg)で

も読むことができる。刊年だけ示せばほかに1900年、1909年などがあって広く読者を獲得したとわかる。



電字版を単行本にしたもの

前者の『ダンヴァースの宝石』は ALLEN J. HUBIN “The Bibliography of Crime Fiction 1749-1975” 1979 に収録される (p.80)。犯罪小説という扱いだ。

題名の異なる2種類とその合訂本が存在する。漢訳は18章だがチャムリ原作のひとつは13章プラス1章だし、もうひとつは31章プラス1章だ。章数が一致しない。漢訳は原作から離れている可能性がある。

どちらが『一粒鑽』の底本なのか。ともかく原文を比較対照するほかない。

貢少芹漢訳を見る

チャムリ著『ダンヴァースの宝石』と貢少芹漢訳『一粒鑽』の冒頭部分を引用して訳をつける。

【原文】 I was on the point of leaving India and returning to England when he sent for me. At least, to be accurate—and I am always accurate—I was not quite on the point, but nearly, for I was going to start by the mail on the following day. I

had been up to Government House to take my leave a few days before, but Sir John had been too ill to see me, or at least he had said he was. And now he was much worse—dying, it seemed, from all accounts; and he had sent down a native servant in the noon-day heat with a note, written in his shaking old hand, begging me to come up as soon as it became cooler. He said he had a commission which he was anxious I should do for him in England. p.1

彼から来るように言われたとき私はインドを離れてイギリスに戻るところだった。少なくとも正確に言えば——私はいつも正確であるが——ちょうどその時というわけではなかったが、翌日の郵便船でほとんど出発しそうになっていたのだ。私は休暇をとるために数日前には総督府にいた。しかしジョン卿は私に会えないほど体調が悪く、あるいはそうなのだとも彼は言っていた。そうして今、彼はもっと悪くなり——すべての面から見て死にそうだった。そこで昼間の暑い中に現地の下男にメモを持たせて寄こした。それには涼しくなったらすぐに来てほしいと彼の震える年老いた手で書いてある。私がイギリスでやってくれるかどうかかわからない頼みごとがあるというのだ。

話し手すなわち主人公が説明をはじめて一人称小説だ。読み進めればそれがミドルトン大佐 (Colonel Middleton) であることがわかる。漢訳冒頭は次のとおり。

【漢訳】 密投頓曰。余今者返英倫矣。憶余初由英至印度時。第為拉陶太尉部下一步兵耳。乃曾幾何時。得海升大佐之職。斯個拉陶太尉援引之力。1頁

ミドルトンという。私は今イギリスのロ

ンドンに帰ろうとしている。思えば私がイギリスからインドに来たとき拉陶大尉部下の単なる歩兵にすぎなかった。それがいつのまにか大佐の地位にまでのぼることができたのはひとえに拉陶大尉の推挙によるものだ。

チャムリ原作の冒頭は貢少芹漢訳と一致しない。ほとんど別物だ。インドをあとにしてイギリスにもどるという部分はそれらしくなぞっている。またミドルトンという人物も原作に出てくる。だが漢訳の拉陶大尉に相当する原文が見当たらない。ただし最後部分に名前が再登場する(138頁)。貢少芹の中では冒頭と末尾で一貫している。

中国の読者にとっては話し手のミドルトンが自分の略歴を説明するほうが物語に入りやすいだろう。貢少芹にはその意識があったのではないか。

ジョン卿(Sir (Ralph) John)が約翰と漢訳されるのは普通のことだ。貢少芹はひとしきりジョン卿の過去とミドルトンとの交流を説明する。ここも貢少芹の創作だ。そのあと原作の冒頭部分が漢訳に出現する。

【漢訳】啓行之前一夕。老人忽遣侍者概斯卡脱至。貽書招余往。且言其有疾。4頁。

出発の前夜、あの老人は突然下男のキャスカートを寄こし私に来るように書いてきた。また彼は病気だとも言っている。

ジョン卿の下男はたしかにキャスカート(Cathcart)という。概斯卡脱である。漢訳は英文原作そのままの直訳ではない。だが貢少芹の翻訳は細かい人名を拾い話の大筋をたどっているといえる。

衰弱した老人ジョン卿がイギリスに帰国するミドルトンに託したのはたくさんの宝石であった。袋からテーブルにあけた宝石についてジョ

ン卿はなにやら意味不明な説明をした。

【原文】I tore it off an old she-devil of a Rhanee's neck after the Mutiny, and got a bite in the arm for my trouble. p.6

反乱のあとのことだったがわしは年老いた女悪魔王妃ラーニーの首からそれを引きちぎったから腕に噛みつかれてな。

物語の最初にインドであることが明記されている。ラーニーはラジャの妻(延原謙は「ある王族の妻」とする)だ。インドの固有名詞と「反乱 Mutiny」を出してきた。チャムリの時代では読者はイギリスとインドの関係をふまえてすぐにその歴史的背景を理解しただろう。

学校の世界史教科書では「セポイの乱」と説明していた。昔の話だ。1857-1858年にインドでおきたイギリスに対する反乱である。現在はイギリス側からは「インド大反乱」といいインド側は「第1次インド独立戦争」と呼称が変化している。

ネックレスの入手先を説明しているようで何もいっていないに等しい。ジョン卿はインドでの商売に成功し長く住んでいた。インドで入手したにしても出所不明のあやしい宝石ということになる。ただ妙に生々しい説明を加えている部分に注目する。

【原文】Look at those diamonds. A duchess would be poud of them. I had them from a private soldier. I gave him two rupees for them. p.6

このダイヤを見てくれ。公爵夫人はさぞかし自慢だっただろうよ。兵卒から手に入れたんだ。2ルピーでな。

公爵夫人と具体的だ。兵卒が彼女からそれを強奪した。いかにもありそうな話だ。ジョン卿がそれを2ルピーとタダ同然で入手したという

のは本当かどうかはわからない。チャムリはわざと説明しない。漠然とした様子に記述している。

インドの反乱といっても中国では理解されないかもしれない。原文どおりに漢訳して注釈をつける方法もあった。だが貢少芹の工夫は原文の2ルピーをもとにして別の物語を作り出したところに見える。

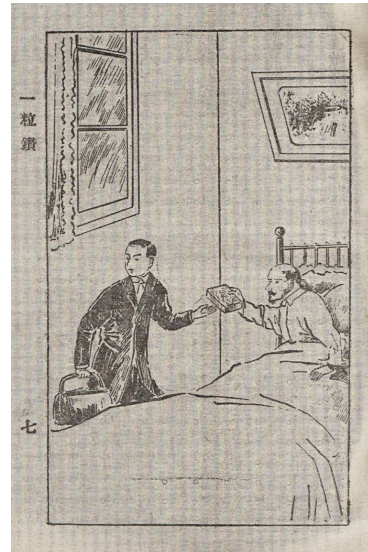
【漢訳】是鑽為法国一貴冑婦為所御。彼往新嘉坡。行經海洋遇盜劫。嗣盜為吾英駐印兵士所獲。故得是鑽。不知寶貴也。欲以是賞酒。冀博一醉。肆人疑為贗鼎。堅不可。適余往肆。見之。立予以二盧比購之歸。6頁

このダイヤはフランス貴族の婦人が所有していた。シンガポールへ行く途中で海賊に強奪された。盗賊はその後わが駐印英兵につかまった。兵士はこのダイヤが高価なものであることを知らず酒にかえて酔っぱらおうと思った。ところが店主は偽物だと疑い承知しない。ちょうどそこにわしが通りかかり直ちに2ルピーで購入して帰ったのだ。

貢少芹は「公爵夫人」「兵卒」「2ルピー」を利用して上のよう書き換えた。原作があいまいで説明不足にしてあるのを補ったつもりだ。読者からすれば理解しやすくなった。

イギリスにいるラルフ・ダンヴァースにその宝石を手渡してほしい。ジョン卿はミドルトンにそう依頼するのだ。ラルフに会ったことはない。しかしその母親のことは知っている[And then he added, hoarsely, 'I knew his mother.']. その場面でダンヴァースの次男ラルフはジョン卿の名字であるという。チャムリはそれだけしか記述していない。秘密にすべき部分だと理解できる。

宝石をミドルトンに手渡す場面が絵図になっている。出版社から依頼された中国人絵師が描



ダイヤを手渡すジョン卿

いたようだ。『盗花』の挿絵と同じ絵師かもしれない。ミドルトン(左)が若すぎるし軍人らしくない。宝石は袋に入れてあるのだが大きな箱のようにしてしまった。インドの家屋内は想像してそうならしい。原作にない挿絵を独自に掲載して違和感がある。

さて原文では人間関係について遠まわしに書かれているのはその事情があるのだ。しかし貢少芹にしてみればそこを明確にしなければ中国人読者の理解は得られないと考えたようだ。チャムリがわざとあいまいにした個所に光を当てた。

【漢訳】自言早歳。曾与同里之女郎梅麗。有啣臂盟。更私訂婚約。事為其父母偵知。強嫁於喬雅淡浮斯為繼室。喬雅世居思滔滿頓埠。為一邑之富豪也。女子歸後仍不忘旧好。約翰亦不娶。期年産子一。名臘腐。實則約翰之血胤也。2-3頁

自分で次のように言った。若いころ同郷の女の子メアリと腕を噛んで血を出すほどの誠実さで結びつきさらには密かに結婚の約束をした。それを父母に知られてしまい無理やりジョージ・ダンヴァース卿(Sir George Danvers)の後妻として嫁がされて

しまった。ジョージはストーク・モートン (Stoke Moreton) に住む町一番の富豪だったのだ。彼女は嫁いだあとも昔のことを忘れずジョンもまた結婚はしなかった。1年後、男子を出産シラルフ (Ralph) と名付けたが実はジョンの血を引いていた。

「継室」すなわち後妻だ。英語で second wife というがチャムリ原作に使用例はない。ジョン卿が会ったこともない人間に高価なダイヤを贈るという一見不自然な行為の背後にはなにかある。あくまでもにおわせているにすぎない。貢少芹は独自に創作したこの部分で梅麗 (メアリ) を使用した。原作で出てくる伯母のメアリ (Lady Mary Cunningham) のことだ。伯母と継母の関係が複雑に見える。

婚姻法

チャムリ原作は宝石をめぐる発生する殺人事件をあつかう犯罪推理小説である。ところが婚姻について曖昧な説明をする。あるいは言及はしても明確に説明しない。主要な部分ではないことはわかる。しかしチャムリの時代を背景にした特別なものと推測できる。主人公がラルフの母親に面会する場面だ (引用文の下線は筆者)。

【原文】 I was introduced to an elderly lady whom I addressed for the rest of the evening as Lady Danvers, until Charles casually mentioned that his mother was dead, and that until the Deceased Wife's Sister Bill was passed he did not anticipate that his aunt Mary would take upon herself the position of step-mother to her orphaned nephews. p.50

私は老婦人に紹介された。その人を私は午後いっぱいダンヴァース夫人だとばかり思っていたのだった。チャールズは彼の母

親が死去したこと、「死んだ妻の姉妹との結婚法案」が通過するまでは伯母のメアリが孤児となった甥の継母になることは期待していないと何気なく話してくれた。

なにを書いているかといえばダンヴァースの妻 (チャールズの母) が死去したあと彼は妻の妹を後妻に迎えたということだ。

「死んだ妻の姉妹との結婚法案 the Deceased Wife's Sister Bill」はそのままでの内容だ。イギリスにおいては死去した妻の姉妹と結婚することは禁止されていた。法案が通過して Deceased Wife's Sister's Marriage Act で成立するのは1907年になってからだ。チャムリの作品はそれ以前に書かれている。小説に書き込むくらいに話題となった法案だとわかる。あるいはチャムリの興味を引く出来事だった。

タブー扱いだったのは中国でも同様だ。陳独秀は姉妹婚であったことにより社会的な非難を受けていた。林紓から皮肉を受ける原因である。

貢少芹はこの部分をどのように処理したか。漢訳を見てみよう。

【漢訳】 見有一人降階迎迓。睨之則四十許麗人也。姿態如仙。豊韻独絶。余自念是殆梅麗耶。無怪約翰為彼終身不娶也。於是脱帽致礼。56頁

階段を下りて出迎えてくれる人がある。見れば40歳くらいの美しい人だ。仙女の姿態で艶やかさが抜きんでている。私はメアリだと思った。なるほどジョンが終身娶らなかつたわけだ。そこで帽子を脱いであいさつをした。

貢少芹は原文を完全に無視した。中国における姉妹婚については口を閉ざしている。推理小説である本作には無用の記述だと考えた。

そう考えたのは日本語に翻訳した延原謙も同様である。例として示す。「レーフの次に紹介

された老婦人を、私は、デンヴァ夫人だとばかり思ひこんでゐて、チャールズからそれが母ではなく、母方の伯母に当るメアリ・カニングムであることを説明されて慌てたりした」(第5章280頁)

『一粒鑽』初版には「提要」(本稿末尾収録)が掲載されている。推理小説に粗筋を掲げるのは読者の理解を助けるためなのだろう。チャムリ原作があいまいにしているから親切心からの解説と思われる。上記の漢訳部分を簡略に表現して「野合之婦之子」である。正式に結婚せず男子を生んだと赤裸々に書く必要があるという判断らしい。言うまでもなくチャムリ原文には「野合 illicit liaison」「私通 fornication, adultery」に類する単語は一切使用されていない。そこを貢少芹のようにすべてを説明してしまうと読者が想像する余地がなくなる。推理小説の楽しみを奪っているというべきだ。

チャムリの原作は犯罪推理小説である。宝石を預かったミドルトンの行った先々で殺人事件が発生する。たとえばミドルトンがジョン卿と別れたあとにジョン卿が殺害されたと知らされる。船中で知り合ったアメリカ人カーにイギリスでの滞在先のメモを渡した。そこは妹の住所だったがミドルトンが訪問すると転居していた。そのあとでその住居の住人が殺害されたのを知った。ミドルトンの関係する人間と場所に不幸が訪れるという一見奇妙で読めば巧妙な筋立てで進行する。その原因はジョン卿がミドルトンに託した宝石にあるのだ。

登場人物対照表

貢少芹の漢訳は冒頭部分が原文とは異なる。部分的な相違はいくつもある。訳者が突然出現して説明する箇所も見られる。ただし小説の大筋はたどっている。登場する人物は基本的に同じだ。英語をほとんどどうまく音訳しているといえる。参考のために以下に主要人物の漢英対照一覧を掲げる。

密投頓	Colonel Middleton	主人公
約翰	Sir (Ralph) John	主人公のインドでの知り合い、メアリの元恋人
解因	Jane	主人公の妹
卡特祿	Valentine Carr	アメリカの盜賊
錫瑪姆	Dulcima	カー(Carr)の愛人=別名: 亜利尼 Miss Aurelia Grant
		ラルフの偽りの婚約者
梅麗	Lady Mary Cunningham	伯母でチャールズにとって継母
		ジョン卿の元恋人
臘腐	Ralph Danvers	メアリとジョン卿の子
		「野合之婦之子」
喬雅淡浮斯	Sir George Danvers	メアリの夫
確而斯	Charles Danvers	ジョージ卿と先妻の長男
伊非林	Evelyn Derrick	姪
		ラルフと結婚する

多彩な人物が宝石をめぐる入り乱れる。ミドルトンがダンヴァース邸まで出向いて手渡した宝石が盗まれた。漢訳はその筋を追いながら結末が大いに異なる。

結末の相違

ミドルトンの預かった宝石を狙っているのは帰国の船中で知り合った親切そうなアメリカ人カーだった。インドのジョン卿を殺し関連場所を訪問して殺人を繰り返した。

宝石が盗まれると作者のチャムリは読者を誤誘導する。カーが犯人だ。いやチャールズが怪しい。宝石を盗んだ犯人は雪の降る中を車でロンドンに向かって逃走した。ところがその大雪のために列車は脱線した。それに乗っていたラルフの婚約者オウレリアは死亡した。カーが突然姿をあらわし横たえられたオウレリアの死体を確認すると出て行ってしまう。

【原文】As we looked, a hurried step came across the yard, a hand raised the latch of the door, and someone entered

abruptly. It was Carr. For one moment he stood in the doorway, for one moment his eyes rested, horror-struck, on the dead woman, then darted at us, from us to the inspector, who was coolly watching him, and— he was gone! gone as suddenly as he had come, gone swiftly out again into the falling snow, followed by the wild barking of the dog. pp.208-209

見る間に急ぎ足の音が庭を横切りドアの門があげられ誰かが突然に入ってきた。カーだった。彼は戸口にちょっと立ち止まると恐怖に襲われた両眼を一瞬その死んだ女性に注ぐと我々を見た。それから彼のことを冷静に観察していた警部に眼をやると——彼はいなくなっていた。来るのと同じように突然行ってしまった。降りしきる雪の中を犬の激しい吠え声に追われながらふたたびすばやく出て行ったのだ。

居合わせた警部は追おうとするチャールズを引き留めた。彼の言葉によるとカーとオウレリアは夫婦で有名な宝石泥棒だったのだ。

原作は意外な結末をむかえた。読者にしてみればあっけなく終了したといえる。カーが静かにその場を去っていったのが衝撃的だ。逃亡したのだから今でもどこかで生きているのだろう。

ところが漢訳ではそこを大きく改変する。追われた卡特禄(カー)はピストルを発射して反撃してきた(134頁)。最後はつかまりロンドンに送られる。亜利尼(オウレリア)は負傷のため死亡した。カは毒薬の哥魯方(即緑気薬水名。氣気であれば塩素。不詳)をあおって自殺した。密投頓(ミドルトン)あての遺書を残していたのだった(136頁)。6頁半にわたる遺書は物語の粗筋をたどりながら事件の種明かしをしたものだ。大部分は貢少芹の創作である。

チャムリ原作のカーは逃亡してしまった。貢少芹の漢訳では書き換えて自殺させる。貢少芹

の感覚では殺人まで犯す強盗は死亡して当然、むしろ死ななくてはならない。因果応報的な思考に支配されていたらしい。凶悪犯はそれだけ生への願望が強いというのがチャムリ流の考えだった。そういう別の筋立てを許容する気は貢少芹にはなかったようだ。

結 論

『一粒鑽』の底本候補として2種類を提示した。『ダンヴァースの宝石 The Danvers Jewels』および『チャールズ・ダンヴァース卿 Sir Charles Danvers』だ。本文と訳文を検討した結果前者『ダンヴァースの宝石』が該当していると断言する。

ただし直訳ではない。作品名を見てもわかる。『ダンヴァースの宝石』が原作名だ。ダイヤを含んだ宝石全体を指している。しかし貢少芹は漢訳題名を『一粒鑽』にしてダイヤだけを強調した。原文の「宝石 jewels」をそのまま漢訳に使用してもいいようなものの『淡浮斯之宝石(亦珠寶)』ではない。イギリス人の名前を出しては中国の読者には理解がむづかしいとでも考えたか。その事情はわからない。『盗花』という予測不可能な題名を考えつくくらいだ。それに比較すればここは原作のダンヴェーズがないだけのかかなり忠実な漢訳ということになる。

漢訳は原作の大筋と登場人物を借りているところまでは正しい。しかし随所に書き換えがある。原作者チャムリが隠しておきたかった、あるいは書くのをためらった箇所を貢少芹は簡単に暴露する。突然訳者が本文中に出現して解説をしはじめる。結末を大きく変更した。漢訳そのものが書き換えを基本にしていることを言わなくてはならない。

漢訳初版に掲げられた「提要」を資料として収録しておく。

㊦

初版所収(記号は筆者)

偵探小説「一粒鑽提要」貢少芹/石知恥合訳は書記一軍官受契友之託、携一極貴重之鑽石、帰



漢訳ドーデ「ベルリン包圍」

——吳構、竊名、胡適

樽本照雄

遺其野合之婦之子、致動盜匪覬覦、既殺其契友、又跟踪而行、交款於軍官、行使百種計畫、卒未得手、嗣盜匪又嗾其婦化裝易名與受鑽者之子偽言結婚、乘間攫鑽而遁、旋經名探勘破真相、設計破獲、由後案而牽涉前案、全書命意布局撲朔迷離、令人不可猜測、至文筆優美、尤其余事

【参考文献】

メアリ・チャムリ (Mary Cholmondely) 著、延原謙訳「死の皮袋 The Danvers Jewels (1887)」『新青年』1929年10月増大号 (10巻12号)、11月号 (10巻13号)、12月号 (10巻14号)、1930年新年増大号 (11巻1号) 博文館。本の友社復刻。Mara Inglezakis, “Introduction to *The Danvers Jewels*” ウェブサイト Victorian Women Writers Project, INDIANA UNIVERSITY, 電字版 2011 楊玉峰「《一粒鑽》」『南社著訳叙録』(中華書局(香港)有限公司2012.12)

1 はじめに

アルフォンス・ドーデ (Alphonse Daudet、1840-1897) 「ベルリン包圍 Le Siège de Berlin」(1873) がある。ナポレオン1世時代に胸甲騎兵だったジューヴ老大佐が主人公だ。彼は愛国精神に凝り固まって妄想を發揮し周囲の人もそれを助長する。悲喜劇短篇小説だといっている。

中華民国初期に3名が該作を漢訳した。吳構「拊髀記(嘆きの老愛国者物語)」(1913)、竊名「老将愛国談(老将愛国物語)」(1916)、胡適「柏林之圍(ベルリン包圍)」(1914) である(記述の都合で発表年順にはしていない)。漢訳題名は違うが同じドーデ作品だ。1913年から1916年までという短期間に同一作品の漢訳が3作も出た。

単にドーデ作品が漢訳されたように見えるかもしれない。現在の感覚からいえばフランス語から直接翻訳されたと考えるのが普通だろう。

しかし清末民初では事情が異なる。吳構、竊名、胡適ともに理解する外国語はフランス語ではない。吳構は日本語だし胡適は英語だ。「老将愛国談」の漢訳者は周瘦鵬だという指摘がある(後述)。周瘦鵬(あくまでも仮定として)であれば英語だ。そうするとドーデの該作品はフランス語以外の言語を経由して漢訳されたこ

となる。

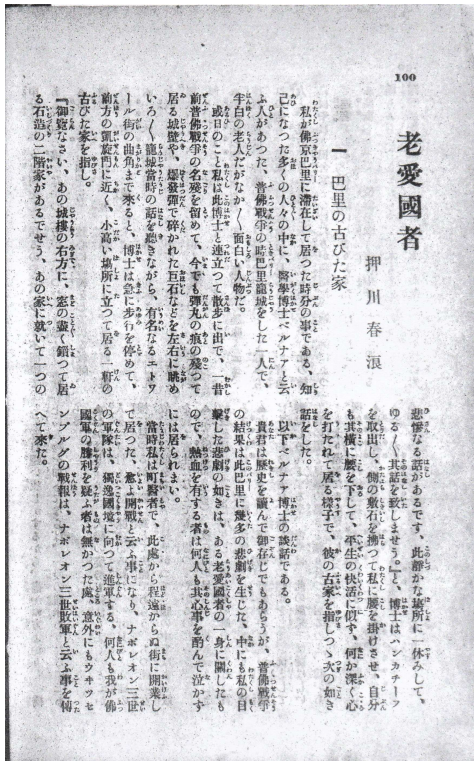
本稿は各漢訳の底本を特定することを目的とする。日本にはすでに先行文献がある*1。それらを参照している。「老将愛国談」と周瘦鵬の関係についても検討対象とする。

2 呉構のばあい

呉構漢訳は次のとおり。(日)押川春浪著、中華呉構宣中訳「(歴史小説) 拊髀記」(『小説月報』4巻3号 1913.7.25)

そこに明記されているように春浪作品が底本となっている。しかし具体的作品名は明らかではなかった。渡辺浩司がそれを解決した。

渡辺が指摘したその作品は押川春浪「(巴黎奇談) 老愛国者」(『(英雄小説) 大復讐』本郷書院1912.9.21。国立国会図書館デジタルコレクション所収。初出は角書なしの「老愛国者」『中学世界』第10第6-7号1907.5.10-6.10)だ。新しい発見がある論文を読むのは楽しい。



押川春浪「老愛国者」『中学世界』第10巻第6-7号 明治40 (1907.5.10-6.10)

これにはもうひとつ奥に別の事実が秘められていた。春浪著作年表*2にも書かれていないことだ。すなわち春浪作品は翻訳だった。原作はドーデ「ベルリン包囲」である。春浪は英語ができた。英語訳にもとづいて「老愛国者」が書かれたと考えてよい。

手順としてドーデの英訳、春浪日訳および呉構漢訳を比較対照する。必要に応じてドーデ原作(刊年不記と桜田佐日訳(1936/1987)を参照)を示す。英訳はエジェット(1895)、マッキンタイア(1900)およびアイヴス(1909)を使用する。それらの詳細は注にまとめる*3。

呉構漢訳を知るためには春浪よりもさかのぼってドーデ原作が必要だ。冒頭を示し桜田訳を添える。

【ドーデ】 Nous remontions l'avenue des Champs-Élysées avec le docteur V..., demandant aux murs troués d'obus, aux trottoirs defonces par la mitraille, l'histoire de Paris assiégé, lorsque un peu avant d'arriver au rondpoint de l'Étoile, le docteur s'arrêta, et me montrant une de ces grandes maisons de coin si pompeusement groupées autour de l'Arc de Triomphe;

« Voyez-vous, me dit-il, ces quatre fenêtres fermées là-haut, sur ce balcon? Dans les premiers jours du mois d'août, ce terrible mois d'août de l'an dernier, si lourd d'orages et de désastres, je fus appelé là pour un cas d'apoplexie foudroyante. p.47

【桜田】 私たちは医者の方のVさんと一しょにシャンゼリゼーの大通りを登りながら、砲弾に穴をあけられた壁や、散弾に破壊された歩道に、パリが包囲された当時の思い出を尋ねていた。エトワルの広場に出る少し

手前まで来ると、医者は立ち止まって、がい旋門の周囲に集まっている華麗な大きい角の家の一つを指さして語りだした。／あのバルコンの上に閉まった四つの窓が見えるでしょう？ 八月の初め——例の騒ぎや災難に悩まされた去年の八月のことです——私は急性卒中症の患者があつて、あそこへ呼ばれました。49頁

名前のない人物が一人称で語り始める。その人が昨年8月にパリ包囲を体験したV医師から当時の出来事を聞くという構成になっている。

医師の名前は頭文字で「V」と示される。略称のみ。後で引用するが春浪は医者の名前を「ベルナア」と名付けた。創作だ。Vernardかなどと勝手に詮索しても意味はない。呉禱はそれを忠実に漢訳して「貝爾竊」とする。この部分だけを先取りすれば竊名は「佻安民」と作った。英訳にはないからこれも竊名独自の漢訳である。それらに比較すれば胡適が「V」に漢音を当てて「衛」とした。読者にとって「衛」は姓のひとつにあるから理解しやすかったかもしれない。

参考までに該当部分の英訳2種を掲げる。

【エジェット】 WE were retuening up the avenue of the Champs É lysées with Doctor V., asking him about the walls riddled with shells, the pavements torn up by grape-shot, in fact, the history of the Siege of Paris, when, just before we got to the Place de l'Étoile, the doctor stopped, and pointing out one of those handsome corner houses grouped around the Arc de Triomphe, said: —

“Do you see those four closed windows up there, over the balcony? In the early day of the month of August—that terrible August of the year '70—so charged with

storms and disasters, I was called in there to a frightful case of apoplexy. p.603

【マッキンタイア】 WE ascended the Avenue des Champs-Élysées with Doctor V—, reading, upon those walls pierced with shells and sidewalks dug up with grapeshot, the story of the Siege of Paris. Just before we reached the Rondpoint de l'Étoile, the Doctor paused, and pointing out to me one of thouse great corner-houses which face the Arc de Triomphe with such a pormpous air, he said,—

“Do you see those four closed windows up there over the balcony? In the early part of the month of August of last year, that awful month full of storm and disaster, I was summoned to that apartment to ateedn a severe case of apoplexy. p.42

【アイヴス】 WE were going up Avenue des Champs-Élysées with Dr. V—, asking the shell-riddled walls, and the sidewalks torn up by grape-shot, for the story of the siege of Paris, when , just before we reached the Rond-point de l'Étoile, the doctor stopped and, pointing to one of the great corner houses so proudly grouped about the Arc de Triomphe, said to me:

“Do you see those four closed windows up there on that balcony? In the early days of August, that terrible August of last year, so heavily laden with storms and disasters, I was called there to see a case of apoplexy. p.245

英訳3種ともに用語の一部が異なっているだけ。全体はほぼ同一でドーデ原作のまま。日本語には翻訳しない。違うと言えばエジェットが英訳した時間表記だ。ドーデ原作では「昨年

8月」だ。マッキンタイアもアイヴスも「昨年
の8月 (August of last year)」と直訳してい
る。しかしエジェットだけは原作にない「(18)
70年の8月 (August of the year '70)」と明
確化する。史実ではあるが忠実な翻訳とはい
にくい。

物語自体が一人称の語りになっていること、
およびドーデ原作が昨年8月の話だとしてい
ることを重ねて言うておく。

先に春浪と呉構の章題を比較する(アラビア
数字を使用。ルビ省略。以下同じ)。

- | | | | |
|---|---------|-----|-------|
| 1 | 巴里の古びた家 | 第1章 | 巴黎之旧家 |
| 2 | 老人と令嬢 | 第2章 | 弱女之承継 |
| 3 | 勝利の幻影 | 第3章 | 戦勝之幻影 |
| 4 | あゝ偽手紙!! | 第4章 | 偽書之怡親 |
| 5 | 最後の日 | 第5章 | 城破之末日 |

ドーデ原作は短篇だから章分けをしていない。
春浪はそこに雑誌初出から工夫をほどこした。

その部分は原作から離れて自由に創作してい
る。呉構は日訳を忠実に反映しさらに漢字5文
字に揃えた。

こちらも冒頭部分を引用する。ドーデ原作、
英訳ともに存在しないことが書かれていること
がわかるだろう(下線は筆者。一部のくり返し
記号は文字に直した)。

【春浪】私が仏京巴里に滞在して居つた時
分の事である、知己になつた多くの人々の
中に、医学博士ベルナアと云ふ人があつた、
普仏戦争の時巴里籠城をした一人で、半白
の老人だがなかなか面白い人物だ。／或日
のこと私は此博士と連立つて散歩に出て、
一昔前普仏戦争の名残を留めて、今でも弾
丸の痕の残つて居る城壁や、爆発弾で砕か
れた巨石などを左右に眺めいろいろ籠城当
時の話を聴きながら、有名なるエトワール
街の曲角まで来ると、博士は急に歩行を停

めて、前方の凱旋門に近く、小高い場所に
立つて居る一軒の古びた家を指し。／『御
覧なさい、あの城楼の右方に、窓の盡く鎖
つて居る石造の二階家があるでせう、あの
家に就いて一つの悲惨なる話があるです、
此静かな場所に一休みして、ゆるゆる其話
を致ませう。』と、 217-218頁

下線部分が春浪の加筆、書き換えだ。春浪
『大復讐』収録の「大復讐」と「女侠姫」は旅
行好きの日本人男性が自身で見聞したことを物
語る。だからドーデ原作が一人称の語りで始ま
るのと不思議に一致していて違和感がない。ド
ーデ作品の語り手が春浪の作ったパリ滞在中の
日本人男性(語り手)と重なるという意味だ。
日本の読者は「老愛国者」もほかの作品と同じ
ように日本人男性の体験談として受け入れただ
ろう。まさかドーデ原作だとは思ひもしない。

前述のとおりドーデでは「V」医師だが春浪
は彼に「ベルナア」の名前を与えた。またマッ
キンタイア英訳とアイヴス英訳を示せば「大砲
散弾に引き裂かれた歩道 (sidewalks dug up
with grapeshot/the sidewalks torn up by
grape-shot)」箇所を春浪が「爆発弾で砕かれ
た巨石」とするのも異なる。「歩道」を「巨石」
に訳したのは奇妙だ。

しかも春浪はさらに説明して「凱旋門に近く、
小高い場所に立つて居る一軒の古びた家」とし
た。パリの小高い場所といえ少離れるモン
マルトルだろう。それではエトワール広場での
凱旋行進を見ることはできない。ジューヴ老
大佐はフランス軍の凱旋行進を見物するために
だけ凱旋門が間近に見える石造りの建物の一室
に引っ越したのだった。春浪の書き方だとその
前提が崩れる。

もうひとつ春浪の書き換えがある。パリ籠城
(包圍)を「一昔前」のことにした。一昔前の
戦争でありながらいまだに破壊部分が残ってい
るとするのは不都合だとは考えなかったらしい。

ドーデでは「去年の8月 (mois d'août de l'an dernier)」(p.47)となっている。昨年のことだからこそ生々しい損傷現場のままなのだった。

マッキンタイアとアイヴスの英訳は両者ともにドーデ原作と同じ。“August of last year”と同文だから区別がつかない。それを春浪は無視した。はるか過去に起こった物語にしてしまった。またエジェットの「70年の8月」とも一致しない。

春浪日訳には以上のように部分的な加筆、書き換えはある。しかしドーデ原作の基本的構造は動かさない。直訳ではなく独自の解釈をほどこした翻案混じりといったところだ。

呉禱漢訳を見る。

【呉禱】 話說俺僑寓法京巴黎之時。所交接的朋輩很多。知己的也不少。内中有一位医学博士。名叫貝爾蕪。當普法爭戰時候。普軍圍攻巴黎。萬分緊急。正當援盡糧絕之時。貝博士也在城中。受過這番困苦。如今已變成一個頹白老人。却是極有趣味瀟灑不羈的人物。那一天。俺和博士蕭閑無事。出外遊行。見城壁上留著許多砲彈殘痕。和開花彈炸碎下來的巨石塊。便覺從前普法爭戰情景宛然如在目前。好不傷懷悵觸。起了無窮今昔之感。眺望一回。一面緩緩踱走。一面又聽見博士講述守城時候情景。及至來到巴黎著名的愛德華街拐角上。貝博士忽地停了脚步。指著靠近前面凱旋門。有個地勢略高的處在。一所旧家房屋。說道。你瞧著。那城樓右邊有一所純用人工礮石建造窗櫺盡行鎖閉的二層樓房屋。這戶人家。當時有一段極悲慘的事情。如今這地方曠闊幽靜。老夫且將那原因始末。對你追述一番。遣遣愁懷。做個酒後茶餘的談助。說著。1頁

さて私が仏京パリーに滞在していた時のことだ。交際した友人は多く知り合いになった人も少なくはなかったが、その中に医

学博士がいてベルナアといった。普仏戦争の時、プロシア軍がパリーを包囲してとても切迫したことがあった。ちょうど援助も食糧も絶えた時、ベルナア博士もそこにいて困苦を味わったのである。今では白髪まじりの老人になっているがとてもおもしろく屈託のない非凡な人物だ。その日、私と博士は気晴らしに散歩に出かけて城壁に残る多くの砲弾痕や炸裂弾で砕かれた大石を見て、以前の普仏戦争の情景があたかも目前にあるかのように感じ大きな悲しみに触れ、限りない今昔の感情が沸き起こった。左右をながめゆっくりと歩いて博士が籠城当時の様子を話すのを聞きながらパリーの有名なエトワール街の曲がり角まで来るとベルナア博士は急に歩みを止めて前方の凱旋門に近い小高くなった場所に古びた一軒の家屋があるのを指さして言った。ごらんなさい。あの城楼の右方に人工石だけで建造した、窓のすべて閉まった二階建ての家屋があるでしょう。あの家の人についてとても悲惨なことが当時ありました。この広くて静かな場所でわたしめがその原因始末をばお話ししましょう。愁いをはらしくつろぎ時の話の種にでも、と言いながら

呉禱は春浪の日本語訳をほぼ忠実に漢訳している。「ベルナア(貝爾蕪)」「エトワール(愛德華)」も対応する。一軒家になっているのもそのまま。ただし少しの加筆がある。「去年8月」の物語であるにもかかわらず春浪が省略して「一昔前」とした。それが呉禱の誤解を発生させた。「半白の老人だ」というのを「今では白髪まじりの老人になっている(如今已變成一個頹白老人)」と時間の経過を長くしてしまった理由だ。

だから「老夫」と老人の一人称にもしている。また呉禱は伝統的説話に慣れているから「做個酒後茶餘的談助(くつろぎ時の話の種にする)」

と常用句を不用意に使用してしまった。これから語る話の内容がパリ包囲の悲惨な状況であることを忘れている。不釣り合いである。

その老大佐がフランス軍の敗北報道を知って意識を失って倒れた。V医師が彼を診察した。フランス軍は負け続けている。その事実を知れば精神的に打撃を受けるだろう。症状が悪化する可能性がある。孫娘とV医師は嘘の情報を老大佐に与えることにした。

ナポレオン1世時代に胸甲騎兵だったジュエヴ老大佐はフランスの大勝利を信じている。それだけに頼って老大佐の精神と身体が維持されているのが実情だった。プロシア軍に敗れていることを隠しとおそうとする孫娘は春浪により「アリーア」と名付けられた。ドーデ原作に名前はない。孫娘は従軍している父からと偽り、祖父へあてた手紙も自作する。

プロシア軍がパリに進撃してくる現実過程をそのままフランス軍のベルリン侵攻妄想に置き換えるというのがドーデ原作の骨格だ。パリ包囲がすなわち老大佐にとってはベルリン包囲となる。

フランスの勝利を確信する老大佐が見ているものは部屋中に飾った過去の栄光を証明する品々である。自分が従軍したナポレオン戦争関係と当時の記念品ばかりだ。老大佐の精神内部は見るできない。それを説明するために目に見える具体的な物品を代わりに示すのがドーデの記述方法だ。底本確定に関係するその箇所を示す。比較をするために二重下線をほどこした。

【ドーデ】 Des portraits de maréchaux, des gravures de batailles, le roi de Rome en robe de baby; puis de grandes consoles toutes raides, ornées de cuivres à trophées, chargées de reliques impériales : des médailles, des bronzes, un rocher de Saint-Hélène sous globe, des miniatures

représentant la même dame frisottée, en tenue de bal, an robe jaune, avec des manches à gigots et des yeux clairs; pp.52-53

【桜田】元帥たちの肖像や、戦争の版画、子ども服を着たローマ王、それからぶんどり品の銅器で飾られた大きながんじょうなテーブル。テーブルの上には、メダルだとか、銅像だとか、丸いガラスぶたの中に入ったセント・ヘレナ島の岩石などという帝政時代の遺物、そでのふくらんだ黄色いローブの舞踏会の服装の、目の澄んだ縮れ髪と同じ婦人を描いた、いくつもの密画が載っています。54頁

「子ども服を着たローマ王 (le roi de Rome en robe de baby)」はナポレオン2世を指す。その肖像画が知られている。ナポレオンその人の肖像ではない理由は不明。

筆者が目にするのは二重下線をほどこした「丸いガラスぶたの中に入ったセント・ヘレナ島の岩石」だ。ナポレオンはセント・ヘレナに流刑となりそこで没した。英訳も見る。

【エジェット】 Portraits of Narshals, engravings of battles, the King of Rome in a baby's robe; then large stiff consoles, ornamented with copper trophies, laden with Imperial relics, medals, bronzes, a stone from St. Helena, under a shade, miniatures—all representing the same lady, becurled, ball costume, in a yellow dress with leg-of-mutton sleeves, and bright eyes— p.605

【マッキンタイア】 Portraits of marshals were there, engravings of battles; there was a picture of the *King of Rome* in baby robes. There were tall stiff consoles ornamented with trophied brass, and loaded with imperial relics, medallions,

bronzes; there was a bit of the rock of St. Helena under a glass globe; there were numerous miniatures always representing the same lady, in ball-room costume, in a yellow robe with leg-of-mutton sleeves, a pair of bright eyes glancing from beneath her carefully curled locks. pp.46-47

【アイヴス】Portraits of marshals, engravings of battles, the King of Rome in a baby's dress, tall consoles adorned with copper trophies, laden with imperial relics, medals, bronzes, a miniature of St. Helena under a globe; pictures representing the same lady all becurled, in ball-dress of yellow, with leg-of-mutton sleeves and bright eyes; p.252

英訳はほぼ同じだ。ただし1カ所が微妙に異なる。下線部分だ。

マッキンタイアは「丸いガラスの中にセント・ヘレナ島の岩石のかけらがおいてあった」とする。ドーデ原作のままだ。しかしアイヴスはそれを「丸いガラスの中にセント・ヘレナ島の小型模型」と英訳した。アイヴスが使用した「miniature」には「小型模型」いわゆるミニチュアと「細密画」の意味がある。しかし「丸いガラス (a globe)」で覆われているのだから「小型模型」である。岩石のかけらと小型模型では同じものにならない。

そこをエジレットは「ランプ傘 (a shade) の下にセント・ヘレナ島の石」とした。「丸いガラス (a globe)」と一致するわけではない。

以上の細かい描写は作品の進行にはたいして影響を及ぼさない。重訳のばあいは省略されることもある。

【春浪】室内にはナポレオン一世の肖像画、その他戦勝将軍の画像、戦利品の長剣、昔の武功を語る勲章など 236-237頁

春浪は全文を削除はしなかった。ナポレオン1世にした。原文にはない「戦利品の長剣」に入れ替えた。肝心の「セント・ヘレナ島の岩石」がない。底本判定の手がかりがここでは失われた。

春浪の改変のひとつは老大佐の息子すなわち娘の父が戦死したことを加筆したことだ(245頁)。フランス軍が破れているのだから娘の父親も死去したことは推測できる。ドーデはあからさまにはしなかったのを春浪は念押しした。

春浪は最後部分も書き換えている。イエナの鼓が鳴りシューベルトの凱旋行進曲が聞こえる。老大佐が凱旋門に見たのはフランス軍ではなくプロシア軍隊だった。衝撃を受け「武器を取れ、プロシア軍だ」と叫んで倒れて死んでしまう。



吳橋漢訳 凱旋見物に準備する老大佐と孫娘

英訳を示す。

【エジレット】And the four Uhlans forming the advanced guard saw yonder on the balcony a tall, old man wave his arms, totter, and fall, rigid. This time Colonel Jouve was really dead. p.606

前衛の4人の槍騎兵がバルコニーの向こうで背の高い老人が腕を振るってよろめき、

硬直して倒れるのを見た。この時、ジュール大佐は本当に死んでしまった。

【マッキンタイア】and the four uhrlans of the advance-guard, looking towards the balcony above, could see the majestic figure of an old man reeling, his arms outstretched. He fell heavily. This time the shock had indeed proved fatal. Colonel Jouve was dead. p.52

前衛の4人の槍騎兵が上のバルコニーの方をながめると、堂々とした老人が両手を広げてよろめいているのが見えた。彼はどろりと倒れた。このたびの衝撃は本当に致命的なものであった。ジュール大佐は死んだ。

【アイヴス】and the four uhrlans of the vanuard saw up yonder, on the balcony, a tall old man wave his arms, stragger, and fall. That time, Colonel Jouve was really dead. p.259

前衛の4人の槍騎兵がむこうのバルコニーを見上げると背の高い老人が両手を広げてよろめいて倒れた。その時、ジュール大佐は本当に死んでしまった。

「This time (このたび)」「That time (その時)」とわざわざ書くのは老大佐が物語冒頭でフランス軍敗北の知らせを聞いて倒れた前例があるからだ。そこを示す。

【エジェット】he fell thunderstruck p.603
雷に打たれたように倒れた

【マッキンタイア】the sudden shock prostrated him p.42

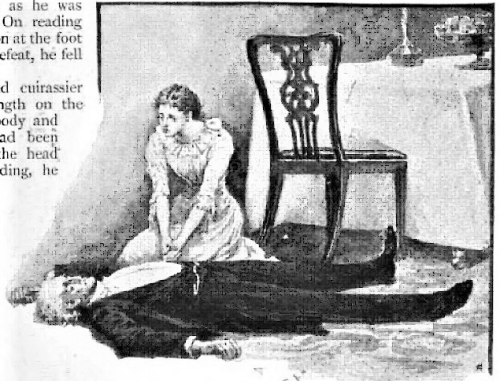
突然の衝撃が彼をなぎ倒した

【アイヴス】he fell like a log p.246
彼は丸太のように倒れた

ドーデ原作は「稲妻に打たれた (il était

tombé foudroyé) 」(p.48)だ。それからするとエジェット「雷に打たれたように倒れた」とマッキンタイアの「衝撃が彼をなぎ倒した」がそのままだ。

ie to him as he was
a table. On reading
of Napoleon at the foot
letin of defeat, he fell
ack.
d the old cuirassier
at full length on the
face bloody and
if he had been
low on the head
rb. Standing, he
ce been
lying, he
mense.
tiful fear-
rb teeth,
head of
te hair,
he was
ghty, he
ce sixty
Near
r knees,
grand-
She so



“THE OLD CUIRASSIER WAS STRETCHED AT FULL LENGTH.”

エジェット英訳挿絵 横たわる老大佐と見守る孫娘

アイヴスの「丸太のように倒れた」では自分で倒壊したように見える。勢いが違う。前2者のあきらかな外部からの強い圧力に比較するからだ。倒れるのは同じだが熱量に差があるように感じる。

以上を見て春浪日記と呉構漢訳を示す。

【春浪】何か叫ぼうとしたが其違もなく、朽木を倒すが如く床に倒れて仕舞つたのである、呼べども答えは無い、呼吸も全く止まった様だ。222頁

【呉構】要想嚷叫上天。也来不及。只聽得撲嗵一声。猶如砍倒枯草朽木一般。跌倒在地 3頁

神様と叫ぼうとしたが間に合わずドスンと音がしてまるで枯草朽木のように床に倒れてしまった。

老大佐の倒れ方だけを見れば春浪日記はアイヴス英訳の方に近いような気がする。どちらかといえば、という程度だ。十分な手掛かりにはならないことはわかっている。

最後は春浪による独自の加筆だ。

【春浪】『祖父様!』と、美しき令嬢は老人の死骸に抱き着いたが、弾丸其前に落つれども起上らぬ、見れば鮮血は滾々として流れて居る、抱き起せば短剣は自ら其心臓を貫いて居つた。／***／以上ベルナア博士は語り終り、最後に沈痛極まりなき一語を加へて、『貴君は日本人、日本を愛するでせうそれと同じこと、仏蘭西人は仏蘭西を愛します、何うか愛国の熱誠を有する者の為に、一滴の涙を灑いで下さい。』／斯く云ひつゝ静かに立上り、凱旋門の遙か北の方角を指して、／『あの蕪鬱たる森の彼方、老愛国者と美しき令嬢が、永久に眠れる墳墓へ行つて見ませう。』(おわり) 249-250頁

春浪はベルナア博士と会話をしているのが日本人だという設定にした。それに合わせて結末を取ってつけた。

『大復讐』に収録する小説はいずれも愛国心の鼓舞を主調とする。本作品でも「愛国の熱誠」を強調したわけだ。

それにしても春浪が孫娘を自殺させてしまったのには驚く。孫娘はそのようには行動しないのではないか。ドーデ原作を知っているから違和感の方が強い。

だが春浪はそうする必要があると判断したから改作したのだろう。日本の読者は孫娘の自殺に理解を示したのか。疑問に思う。

呉禱漢訳の該当部分を次に引用する。

【呉禱】麗娃叫声祖父啊!抱著老大佐的屍骸。牢結不放。任是砲彈子颼颼在身傍。一絲也不動。我湊近一看。只見涇涇地鮮血迸流。只道他是中了砲彈。連忙抱起一看。誰知一支短劍。插入胸間。直向心窩穿貫而入。這時麗娃臉上反顯得淺泛桃花。紅潮薄暈。似乎十分喜樂。格外美艷咧!!!貝爾竊博士對

我說罷。這一番事跡。末了兒又說一句極沈痛的話道。足下是日本人。定然愛著日本。和俺法蘭西人愛著法蘭西一般。如今聽了這樣一位愛国的老人。想必感痛悲傷。也要灑下幾点英雄之淚咧。說罷。靜悄悄立起身來。遙指著凱旋門北方角上一個處在。又淒然道。你瞧名邊樹林蕪鬱之中。正是愛国老人紀艾波和他孫女麗娃永睡長眠的墳墓。每當夕陽西下。將近黄昏。我兀自恍惚看見老人歡顏笑靨的形容。和麗娃冰肌玉骨妬月羞花的面貌。(完) 16頁

呉禱漢訳は春浪日訳のほぼ直訳となっている。「ほぼ」というのは下線部分を加筆しているからだ。

死んでしまった老大佐に抱き着いた孫娘が起き上がらない。医者が見れば孫娘は短剣で自ら心臓を貫いていた。そういう場面だ。砲弾が近くに落ちたというだけでは不足だと呉禱は考えた。「彼女は砲弾に当たったと言うと(只道他是中了砲彈)」を補足して強調した。

孫娘の様子を描写しないではいられない。「この時アリーの顔はかえって薄っすら桃色にそまって紅潮してかすんだように、まるで十分に楽しそうに格別に美しかったのですよ!!! (這時麗娃臉上反顯得淺泛桃花。紅潮薄暈。似乎十分喜樂。格外美艷咧!!!)」

最後部分も春浪のように「永久に眠れる墳墓へ行つて見ませう」とは提案しない。書き換えをさらに改変して呉禱は医師の回顧にした。「夕陽が西に沈み黄昏ちかくになるたびに、私はやはり老人の笑顔にえくぼの様相とアリーの美しい肌と月も羨み花も恥じてしまう容貌をぼんやりと目の当たりにするのです(每當夕陽西下。將近黄昏。我兀自恍惚看見老人歡顏笑靨的形容。和麗娃冰肌玉骨妬月羞花的面貌)」

呉禱は老大佐の妄想に加えて話し手の幻想を追加したということになる。

3 竊名のばあい——周瘦鵑か？

春浪「老愛国者」は署名「道」が翻訳して「老将愛国談」になっている。このことを指摘したのも渡辺浩司だ。新しい見解である。訳者「道」について渡辺は周瘦鵑だと推測した。

その根拠を示せば次のとおり。
ふたつの作品が関係する。

ひとつは周瘦鵑の別作品「磨坊主人」（『小説月報』第3巻第9号 1912.12.25）がもとになる。それが于潤琦編『清末民初小説書系・愛国巻』に収録されて署名が「道」だ。「磨坊主人」を仲介させて「“道”＝周瘦鵑と考えられる」。

重要だからくり返す。周瘦鵑の「磨坊主人」が于潤琦編集本に収録されて「道」と署名される。同一作品に表示する「道」は周瘦鵑である。理屈は通っている。

もうひとつは「老将愛国談」でこれも于潤琦編集本に収録されて署名は「道」だ。以上を見る限り道「老将愛国談」は周瘦鵑の漢訳だといっている。

しかし渡辺は同時に懸念を表明する。「ただ、先に発表されたと思われる小説月報誌で、本当の姓“周”と字“瘦鵑”を名乗り、後出と思われる《愛国英雄》下編で、“道”という筆名に改めたのは不思議な感じがする」（『清末小説から』第106号2012.7.1。16頁）。慎重で合理的な判断だと思う。一応の結論に独自の疑問符をつけたと理解する。

以上を読んで、不審点があるにしても私は疑問に思わなかった。つまり渡辺のいうように「老将愛国談」の訳者は周瘦鵑だと考えていたのが正直なところだ。

本稿を書く準備段階で検討した。「老将愛国談」についていえば道と周瘦鵑の関係がどこかおかしい。手元にあるいくつかの資料をならべてみてそのことを確信するにいたる。

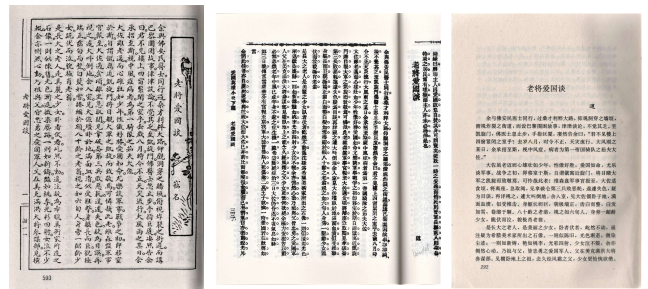
現在判明している範囲内で該作品が転載された順序を図式にして示す。

竊名「老将愛国談」（『小説名画大観』所収）
→道「老将愛国談」（『愛国英雄』下編所収）
→道「老将愛国談」（于潤琦編『清末民初小説書系・愛国巻』所収）

一目瞭然だ。そうして問題の所在をつきとめた。

最初に漢訳をした人は「竊名」だった。ならば于潤琦が典拠とした「『愛国英雄』下編」が「道」に変更したのか。ここが肝要だ。確認する必要がある。

于潤琦本のいう「『愛国英雄』下編」は次に示すように『愛国英雄小史』が正式書名だ。以前は該書を見ることができなかった。影印本を入手してみてようやく署名が「道」となっていることが確認できた。



竊名 → 道 → 道

署名について図式化する。竊名（『小説名画大観』所収）→道（『愛国英雄小史』所収）→道（于潤琦編『清末民初小説書系・愛国巻』所収）

最初は竊名だったものが『愛国英雄小史』収録の際になぜだか道と変更された。それを于潤琦が継承したということになる。

先に示した「磨坊主人」についても見ておこう。これも発表順に図式化する。署名だけを示す。

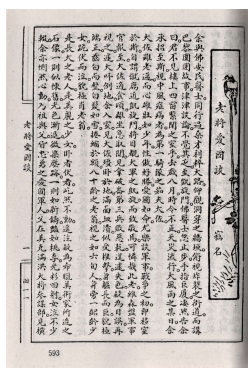
周瘦鵑（『小説月報』初出）→闕名（『愛国英雄小史』所収）→道（于潤琦編『清末民初小説書系・愛国巻』所収）

『愛国英雄小史』に収録された「磨坊主人」の署名は闕名なのである。作者不明であるという意味だ。佚名と同じ。該書を編集する際になぜかは知らないが『小説月報』にある周瘦鵑の名前を失った。そうして処理した結果が「闕名」表記だろう。

于潤琦本がさらに奇妙な編集を行なった。彼は「闕名」とあるそれを「道」と誤記した。どこから持ってきたのか不明だ。事実にもとづいていない。典拠不明のため信頼を喪失する。署名が「道」ではないから「道=周瘦鵑」とはならない。

「磨坊主人」は周瘦鵑と明記すべき作品である。少なくとも使用した『愛国英雄小史』にある「闕名」を写すのが当然だった。それを于潤琦が勝手に「道」と書き換えたと確かめておく。

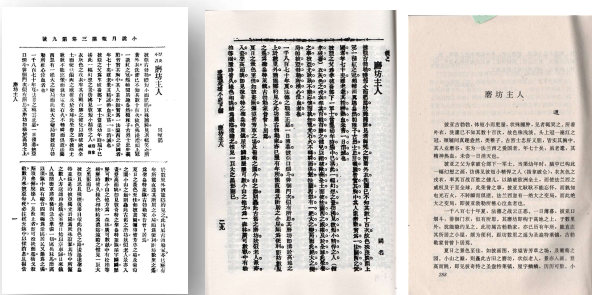
1916.10/北京・書目文献出版社1996.7影印 北京図書館蔵珍本小説叢刊。角書なし。目次は「愛国類」、分類して「愛国小説」。



影印本 表紙 本文

2 道「老将愛国談」王瀛洲編纂、吳綺縁評点『愛国英雄小史』上海・交通図書館 1917.8.1、名著小説一千種第一類/[樽本C] 奥付なし。35頁が欠。『小説名画大観』で補うことができる。

注：[付三12] 奥付写真の刊年は中華民国六年八月一号初版。孔夫子旧書網に写真あり。奥付写真は中華民国七年八月一号初版/中華民国八年二月一号再版。再版本は初版の刊行年を誤る。



周瘦鵑 → 闕名 → 道

調べてみれば「道」を作者名とするのは『愛国英雄小史』に限る(合計2例)。ほかの単行本、雑誌には見ることができない。もとから根拠があやふやだった。というわけで「磨坊主人」と「老将愛国談」の著者は関係がなくなる。

ついでに言えば王智毅『周瘦鵑研究資料』(1993)は周瘦鵑の筆名をいくつか掲げるが「道」は収録しない。

「老将愛国談」には次の2種類がある。于潤琦本は含めない。

1 竊名「老将愛国談」胡寄塵編『小説名画大観』上海・文明書局、上海・中華書局



影印本 表紙 本文

1の署名は「竊名」、2は「道」となっている。該小説を収録した『小説名画大観』と『愛国英雄小史』はともに編集本だ。それ以前に初出があるのではなかろうか。しかし今それを探

し当てていない。

「竊名」名の作品は『小説名画大観』に6篇を収録する。周瘦鵬の作品は別に17件ある。作品は重複しない。

本稿に着手した頃は周瘦鵬の作品だと考えていた。だから次のように書いて説明を継続するつもりだった。

周瘦鵬は英語を理解した。漢訳した当時を回想して次のように述べている。「私が理解したのは英語だけだったからその他の各国名家の作品は英訳から転訳したものにすぎない(由于我只懂得英文, 所以其他各国名家的作品, 也只有從英訳本転訳過來)」*4

その後を展開していけば周瘦鵬漢訳は春浪日訳とは無関係だと述べることになる。

ところが実物で確認すれば周瘦鵬ではなく竊名ということがわかった。これを意表外のことだという。ふりだしに戻る。本稿は今後、作者を詳細不明の竊名として説明する。周瘦鵬とは別人だと考える。

渡辺は呉禱「拊髀記」が春浪「老愛国者」にもとづいており、さらに「老将愛国談」と同一だと指摘した。作品内容についてだけ見るならば、それは正しい。

注意をする必要があるのは翻訳の経路だ。呉禱は春浪日訳を漢訳した。これはそのとおり。もうひとつの竊名は日訳に関係なくドーデの英語訳を底本とした。出てきた結果が偶然ドーデの同一作品であったことになる。

冒頭を引用すればそれがわかるだろう。

【竊名】余与仏安民医師。同行過桑才利粹大路。仰觀洞穿之牆垣。俯視炸裂之街道。而講巴黎圍困故事。津津談論。不覺其乏。至凱旋門。仏医士忽止歩。手指巨厦。凄然告余曰。君不見楼上四窗緊閉之室乎。去歲八月。時令不正。天災流行。大風雨之某日。余承招至斯。視中風症病者。為第一騎隊之茹夫大佐。 国11オ

私は仏安民医師と一緒にシャンゼリゼ大通り行きながら穴のあいた壁を仰ぎ見、爆破された歩道を下に眺めてパリ包圍の物語をして興味津々で疲れを感じなかった。凱旋門に来ると仏医師はふと立ち止まり大きな建物を指さして痛ましそうに私に語りだした。あの建物のきっちり閉まった四つの窓の部屋が見えませんか。去年の8月、時節がよくなく天災が流行した大雨風のある日、私はそこに呼ばれて卒中患者を診たのですがそれが第一騎兵隊のジューヴ大佐でした。

竊名はV医師を「仏安民」と独自に作った。地名の省略はあるもののそれら以外はほとんど英訳どおりに漢訳している。春浪日訳とは関係がない。

底本が英訳だと考える小さな根拠がある。フランスの將軍マク・マオン (Mac-Mahon) だ。「h」は読まない。しかし竊名は「マクマホン」と英語読みして「美克満洪」である。

春浪日訳で取り上げたいいくつかの比較例を竊名漢訳でも見ておく。

老犬佐が卒中になった場面から。以下の英訳は重複するから日訳のみを引用する(以下同じ)。

【エジェット】雷に打たれたように倒れた。603頁

【マッキンタイア】突然の衝撃が彼をなぎ倒した。42頁

【アイヴス】彼は丸太のように倒れた。p.246頁

【竊名】遽大叫倒地。国11オ
急に大きく叫ぶと床に倒れた。

ここだけ見るとアイヴスに近い。ただし短文だから決め手にはならない。

手がかりは乏しい。あの室内にかざられた記

念品の「丸いガラスの中にセント・ヘレナ島の岩石」だ。竊名はそこを省略している。

アイヴスではなさそうな個所もある。フランス軍勝利の報道が届いた。意識を回復した老大佐が「勝利！」と2度くり返した。医師はそれを受けて発言する。

【エジェット】 Yes, Colonel, a great victory! p.603

そうです、大佐、大勝利です！

【マッキンタイア】 Yes, colonel, a great victory! p.44

そうです、大佐、大勝利です！

【アイヴス】 ナシ p.248

【竊名】 余告之曰。誠然大佐。我軍大捷。国11ウ

私は言った。そうです大佐、我が軍の大勝利です。

この竊名漢訳はエジェットとマッキンタイアのままだ。アイヴスでは省略されたから一致のしようがない。上の小さい例ではあるがアイヴス英訳は漢訳底本の候補からはずれる。

物語の最後部分を示す。

【エジェット】 前衛の4人の槍騎兵がバルコニーの向こうで背の高い老人が腕を振ってよろめき、硬直して倒れるのを見た。この時、ジュール大佐は本当に死んでしまった。606頁

【マッキンタイア】 前衛の4人の槍騎兵が上のバルコニーの方をながめると、堂々とした老人が両手を広げてよろめいているのが見えた。彼はどさりと倒れた。このたびの衝撃は本当に致命的なものであった。ジュール大佐は死んだ。52頁

【アイヴス】 前衛の4人の槍騎兵がむこうのバルコニーを見上げると背の高い老人が両手を広げてよろめいて倒れた。その時、

ジュール大佐は本当に死んでしまった。

259頁

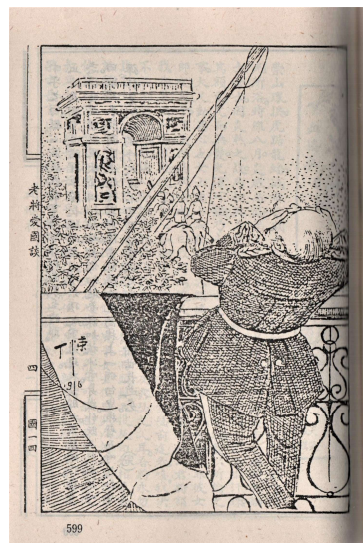
【竊名】 徳軍前隊。當能隱約見高樓上一頰白叟。振臂而呼。忽如中彈。仆身倒地。嗚呼。大佐不忍目睹國民之失敗。而遂謝世長逝矣。国14ウ

プロシア軍の前衛は高い建物の上に半白の老人が腕を振りまわし叫んでいたのが突然弾に当たったかのようにどさりと倒れたのがぼんやりと見えた。ああ、大佐は国民の失敗を見るに忍びず、ついに死んでしまったのだ。

竊名は「不忍目睹國民之失敗（国民の失敗を見るに忍びなかった）」を書き足した。

老大佐の倒れ方といっても微妙な表現だ。エジェットの「硬直して倒れる」とマッキンタイアの「彼はどさりと倒れた」に近いように思う。アイヴスの「よろめいて倒れた」よりも力が入っていると感じるからだ。竊名が補足して「忽如中彈。仆身倒地（弾に当たったかのようにどさりと倒れた）」と記述したのと重なる。

竊名の漢訳はアイヴス英訳ではなくエジェット英訳あるいはマッキンタイア英訳を底本にしているように思う。



竊名漢訳

4 胡適のばあい

胡適漢訳ドーデ「最後の授業」についてはすでに論文がある*5。

胡適漢訳「最後一課」はドーデのフランス語原文ではなくレイノルズ (Francis J. Reynolds) 英語訳本 (1910) を底本に使用した。マッキンタイア英訳でもアイヴズ英訳でもなかった。

胡適漢訳の各種版本について本稿ではくり返さない。使用するのは胡適訳『短篇小説』第一集 (上海・亜東図書館1919.10/1931.6十五版) であることだけを記す。

該書に収録されたのが「柏林之圍」である。

その際に文言を白話で書き直そうとは思わなかった。「訳者自序」でひとこと「私のこの10篇は一挙に翻訳したものではない。ゆえに数篇は文言で訳した。いま改訳する余裕がなかった(我這十篇不是一時訳的, 所以有幾篇是用文言訳的, 現在也来不及改訳了)」(2頁)と説明したのみ。

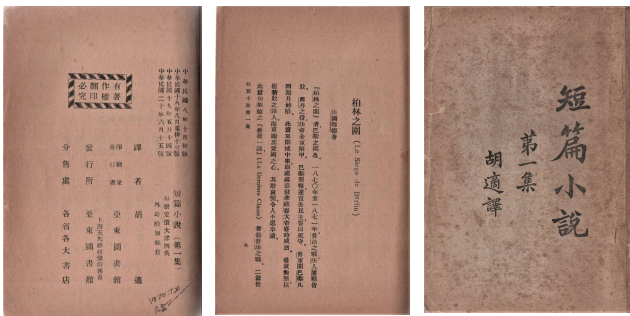
胡適は白話の使用をすでに主張している。言い訳をするくらいだ、自分の白話主張と文言漢訳が一致していないとの認識はあった。だが時間的余裕がないと言い逃れただけ。自分の主張を自らが実践して実現しようとは思わなかった。反省はしていない。もともと白話を主張する文章を文言で書いた胡適なのだった。主張と実践がずれているということだ。胡適自身がそれを修正するつもりがないことが確認できる。

「柏林之圍」には割り注がほどこされた箇所が複数ある。パリ包圍という歴史的題材だから「一八七〇年八月四日」(11頁)とか「自一八〇四至一八一四拿破帝盛時, 是為第一帝国(1804年から1814年までナポレオン皇帝の盛時を第一帝国という)」(15頁)などと説明した。当然ドーデ原作にはない。マッキンタイア英訳にもそのような注釈は存在しない。この注は胡適がつけたものだろう。

胡適の漢訳傾向を知る簡単な例を挙げる。フランスの将軍マク・マオン Mac-Mahon を胡適は「麦馬洪」と表記して英語読みである。「最後一課」のアメル Hamel 先生を「漢麦先生」と漢訳したのと同じだ。春浪が「マクマオン」とし呉構がそれを受けて「馬克蒙」と漢訳したのと比較すれば違いがわかる。

マッキンタイア英訳を再度引用し胡適漢訳冒頭を示す(傍線省略。以下同じ)。

【マッキンタイア】WE ascended the Avenue des Champs-Élysées with Doctor V—, reading, upon those walls pierced with shells and sidewalkes dug up with



奥付

本文

表紙

英訳についてはすでにマッキンタイア英訳であるとも指摘がなされている。レイノルズ英訳は見つからない。

本稿はそれを参照した。漢訳内容を簡単に比較対照しておく。

胡適「柏林之圍」は文言で漢訳されている。原題を“Le Siege de Berlin”と示してあたかもフランス語から直接漢訳したように装う。胡適は自分の漢訳すべてについて底本を明記はしていない。それが当時の習慣だった。

『短篇小説』第一集の刊行は1919年だから林訳批判はすでに実行されている。胡適自身が外国語を理解しない林紘を厳しく批判した事実が背景にある。だからどうしても原語からの直訳にしたかったようだ。

胡適の漢訳はアメリカ留学中になされた。とはいえ自分が林訳批判を行なったあとにそれを『短篇小説』に収録した事実是否定できない。

grapeshot, the story of the Siege of Paris.

私たちはV医師とともにシャンゼリゼ通りを登り、砲弾で貫かれた壁や散弾で掘られた歩道に、パリ包囲の物語を読み取っていた。

【胡適】余等与衛醫師過凱旋門大街，徘徊於鎗彈所穿之頽垣破壁間，凭吊巴黎被圍時之往迹。10頁

私たちは衛医師と凱旋門通りを抜けて、砲弾で貫かれて破壊された壁のあたりをうろつきながらパリ包囲当時の昔をしのんだ。

胡適は破壊された城壁は漢訳したが歩道のほうは無視した。直訳にはなっていない。

英訳3種が細かく異なる個所がやはり胡適漢訳の底本を再確認する手がかりになる。すでに示した老大佐の身の回りにある遺物だ。

【エジェット】a stone from St. Helena, under a shade p.605

ランプ傘の下にセント・ヘレナ島の石

【マッキンタイア】there was a bit of the rock of St. Helena under a glass globe p.47

丸いガラスの中にセント・ヘレナ島の岩石のかけらがおいてあった

【アイヴス】a miniature of St. Helena, under a globe p.252

丸いガラスの中にセント・ヘレナ島の縮小模型

【胡適】又有聖希列拿島（拿帝幽死之島）之崖石，玻盒盛之。15頁

セント・ヘレナ島（ナポレオン帝が幽閉されて死去した島）の岩石がガラス箱に入れられていた。

エジェットの「ランプ傘」、アイヴスの「縮小模型」に注目して述べた。やはりマッキンタイアの「丸いガラス」「岩石のかけら」に絞ら

れる。胡適がセント・ヘレナ島の岩石を入れた「玻盒」はガラスの箱もの、あるいはガラス蓋とすればマッキンタイア英訳が底本である。

最後にドーデ原作と英訳3種に存在しない文章が胡適漢訳にはあることを指摘しておく。

ある日医者がいつものように老大佐宅を訪問すると孫娘がフランス軍がマイヤーヌを取ったと痛ましい微笑を浮かべて告げた。

【エジェット】‘Doctor, we have taken Mayence,’ the young girl told me, coming towards me with a heart-breaking smile, p.604

【マッキンタイア】‘Doctor, we have taken Mayence,’ said the young girl, advancing towards me with a heart-rending smile, p.45

【アイヴス】‘Doctor, we have taken Mayence,’ the girl would say to me, coming to meet me with a heart-broken smile, p.250

英訳3種ともほとんど同文になっている。heart-breaking、heart-rending、heart-brokenと孫娘の心情を表現して共通する「痛ましい」微笑だ。それは嘘であることを意味する。続いてドア越しに老大佐が「ベルリン入城だ」とうれしげに叫ぶのが聞こえる。ここで医師の発言はなされていない。ところが胡適漢訳はなぜだか異なる語句を挿入した。

【胡適】女每奔入室告余曰，『我軍取梅陽矣。』余亦和之曰，『然，余今晨已聞之。』13頁

娘はいつものように部屋に急いで入ってくると私に言いました。「わが軍はマイヤーヌを取りましたよ」。私はそれに合わせて言いました。「そうですね、私は今朝それを聞きました」

マイヤーヌを取ったと嘘をついた。その後の箇所が問題だ。医師が孫娘に同調して発言する部分を見てほしい。ドーデ原作、英訳3種のどこにもない。それはそうだ。医師が孫娘の嘘を事前に聞いていることなどありえないからだ。だが胡適にしてみれば無理やり口裏を合わせたというつもりかもしれない。

似たような場面はその前にある。老大佐が意識を回復して「勝…利」というのに医師は追従して「そうです、大佐、大勝利です！」と答えた。胡適はそれを「余亦和之曰、『誠大捷也。』」(12頁)と漢訳している。ここからの

固有名詞対照表

連想だろうか。

だがこの「私はそれに合わせて言いました。「そうですね、私は今朝それを聞きました」」は同じ語句を部分的に使用して、ありもしない状況を作り上げた。孫娘と医師は嘘をつくことを合意した。それがあから胡適の創作は容認できるという人がいるかもしれない。しかしここでなぜそうする必要のあるのか。だいいち英訳から離脱するではないか。そこから見ても意味がわからないという。結局のところ胡適は英訳から直訳するつもりはなかったのだ。林訳を激しく批判しておいて自分の漢訳には知らん顔をするのかと鼻白む。 罫

Daudet ドーデ	Ives アイヴス	McIntyre マッキンタイア	春 浪	吳 橋	竊 名	胡 適	桜 田
docteur V...	Dr. V——	Doctor V——	ベルナア	貝爾竊	仏安民	衛	Vさん
Champs-Élysées	Champs-Élysées	Champs-Élysées	×	×	桑才利粹	凱旋門大街	シャンゼリゼー
colonel Jouve	Colonel Jouve	Colonel Jouve	ジ(シ) エーブ大佐	紀艾波	茹夫大佐	朱屋大佐	ジュール老大佐
Wissembourg	Wissembourg	Wissembourg	ウキツセンブルグ	威勝堡	維森盤	維生堡	ヴィッセンブルグ
Napoléon	Napoleon	Napoleon	ナポレオン三世	拿破崙第三	拿破崙	拿破崙	ナポレオン s s
×	×	×	孫娘アリアア	麗娃	×	×	×
Mac-Mahon	MacMahon	MacMahon	マクマ(ヤ) オン	馬克蒙	美克滿洪★	麥馬洪★	マク・マオン
Reichshoffen	Reichshofen	Reichshoffen	ライヒシオーヘン	萊秀亨	雷虛華芬	雷舒賀墳	ライヒスホーフエン
Bazaine	Bazaine	Bazaine	バーゼン	巴純	白尚	巴遜	バゼーヌ
Berlin	Berlin	Berlin	伯林	柏林	徳京	柏林	ベルリン
Froissart	Froissart	Froissart	フロツサル	溥菓沙	仏華生	滑煞	フロワサル
Bavière	Bavaria	Bavaria	バアバク	巴白克	勃維亜	巴維亜	バヴァリヤ
Baltique	Baltic	Baltic	バルト	巴徳	巴爾地喀	巴羅的	バルチック
Mayence	Mayence	Mayence	メイヤンス	梅秧司	梅盎斯	梅陽	マイヤーヌ
Saint-Hélène	St. Helena	St. Helena	×	×	×	聖希列拿島	セント・ヘレナ島
Sedan	Sedan	Sedan	セダン	水檀	×	西丹	セダン
Porte Maillot	Porte Maillot	Porte Maillot	×	×	×	梅鹿	マイヨー口
Invalides	Invalides	Invalides	×	×	×	残敗軍人院	アンヴァーリド
Buzenval	Buzenval	Buzenval	×	×	×	×	ビュザンバル
l'avenue de la Grande-Armée	Avenue de la Grande Armée	Avenue de la Grande Armée	×	×	×	×	グランド・アルメ通り
Lutzen	Lutzen	Lutzen	×	×	×	×	リュツェン
Tuileries	Tuileries	Tuileries	×	×	×	×	チュイルリー
Milhaud	Milhaud	Milhaud	×	×	×	×	ミヨー
léna	Jena	Jena	×	×	衣愛那	耶拉	イエナ
Schubert	Schubert	Schubert	×	×	×	許伯	シューベルト

1) 【参考文献】

岡崎由美「武侠の黎明——押川春浪と近代中国武侠小说」蘆田孝昭教授退休紀念論文集編集委員会『蘆田孝昭教授退休紀念論文集 二三十年代中国と東西文芸』東方書店1998.12.12

渡辺浩司「《拊髀記》の原作」『清末小説から』第105号 2012.4.1

——「《愛國小説 鶴》の原作/《拊髀記》の原作(補)」『清末小説から』第106号 2012.7.1

呉 燕「『燈臺卒』をめぐって」『清末小説』第33号 2010.12.1

2) 「押川春浪」の編者名不記「二、著作年表」昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第15巻 昭和女子大学光葉会1960.6.5。30頁

3) 【使用文献】

○ドーデ ALPHONSE DAUDET 原作“LE SIÈGE DE BERLIN”(“CONTES DU LUNDI” PARIS: LIBRAIRIE AOHPNSE LEMERRE, (1873) 刊年不記) open library 所収

○エジエット EDWIN FRANCIS EDGETT 英訳“THE SIEGE OF BERLIN”(“THE STRAND MAGAZINE” JUN 1895. VOL. IX, 1-6月合冊。1883初訳) hathi trust 所収

○マッキンタイア MARIAN McINTYRE 英訳“THE SIEGE OF BERLIN”(“MONDAY TALES” BOSTON: LITTLE, BROWN, AND COMPANY, 1900) hathi trust 所収

○アイヴス GEORGE BURNHAM IVES 英訳“THE SIEGE OF BERLIN”(“ALPHONSE DAUDET'S SHORT STORIES” NEW YORK AND LONDON: G. P. PUTNAM'S SONS, 1909) open library 所収

○ドーデー作、桜田佐訳「ベルリン攻囲」(『月曜物語』岩波文庫1936.2.10/1987.10.6第五十刷)

4) 周瘦鵑「我翻譯西方名家短篇小說的回憶」『雨花』1957.6.1初出未見。王智毅『周瘦鵑研究資料』天津人民出版社1993.2。254頁

5) 樽本「早期漢訳ドーデ「最後の授業」」『清末翻譯小説論集(増補版)』2017.1.15所収

清末小説から

汪 家榕○商務印書館新生50年 『北京出版史志』第16輯 2000.11

呉 倩○20世紀初頭における商務印書館の教科書と日本 『国際基督教大学学報3-A、アジア文化研究別冊』2005.3.31

陳 愛陽○日本最初原創現代偵探小説的中文訳介——《無慘》翻譯の文本研究 『漢語言文学研究』2011年第3期

汪 家榕○『中国近现代出版家列伝・張元濟』上海辞書出版社2012.10

陳 宏淑○包天笑翻譯策略之評析：從《馨兒》到《苦兒》 高亮、陳平主編『翻譯研究与跨文化交流』台湾・書林出版有限公司2013.9

——○在小説中翻譯“地理”——包天笑的《秘密使者》轉訳史 『翻譯史研究』第6輯 上海・復旦大學出版有限公司2017.5

楊 鳳鳴○吳禱与契訶夫——從《黑衣教士》看吳訳受到的日本影響 『東方翻譯』2013年第6期(総第26期) 2013.12

謝 天振○三説錢鍾書《林紘的翻譯》 『東方翻譯』2013年第6期(総第26期) 2013.12

国 蕊○伯爵夫人的轉訳之旅——從對《虚無党奇話》翻譯与改写看陳景韓啓蒙意識的轉變 『瀋陽師範大學學報(社会科学版)』2018年第1期(第42卷第1期) 2018.1.30 複写あり

季 凌婕○如何諷刺——*Gulliver's Travels* 晚清中訳本《海外軒渠録》研究 『翻譯史研究』第7輯 上海・復旦大學出版有限公司2018.11

苗 懷明○《老殘遊記》写作緣起新考 『文献(双月刊)』2019年第5期(総第175期) 2019.9.13

文 迎霞○清末小説《緝紳鏡》文体考辨 『瀋陽教育學院學報』2020年第3期 2020 未見

——○一個福爾摩斯故事的兩個晚清訳本對比研究 『商丘師範學院學報』第36卷第2期 2020.2

喬 昭○陳春生の生涯と著作「陳春生の生涯と著作」関西大学『東アジア文化交渉研究』第14号 内田慶市教授古希記念号 2021.3.31

戰 玉冰○清末民初中国偵探小説中的傳統性因素 『學術月刊』2021年第9期 2021.9.20

- 陳玉蘭、干寧寧〇“海島漂流”母題在王韜“小説三書”中的新變 『明清小説研究』2022年第1期(総第143期) 2022.1.15
- 王 宗輝〇【書評】《百年中国通俗文学価値評価》の新進展 『中国現代文学研究叢刊』2022年第3期(総第272期) 2022.3.15
- 鄭曉嵐〇晚清冒險小説(1898-1911) 篇目整理、発現及刊行情況 『西南交通大学学报(社会科学版)』2022年第4期(第23卷、総第130期) 2022.7
- 張 人鳳〇夏瑞芳張元濟合作与交誼考 『中国出版史研究』2022年第3期(総第29期) 2022.7.20
- 付 建舟〇『清末民初<説部叢書>叙録』 北京・中国社会科学出版社2022.8
- 柯 希璐〇《玉梨魂》の発生与接受考論 『中国現代文学研究叢刊』2022年第8期(総第277期) 2022.8.15
- 魯 毅〇中国近代女性小説家呉懋情生平創作考論 『明清小説研究』2022年第4期(総第146期) 2022.10.15
- 王 文君〇稀見資料之疑：対小説史料学的再審視——以蔣瑞藻《小説考証》引書为中心 『明清小説研究』2022年第4期(総第146期) 2022.10.15

『清末小説から』第145号

2022.4.1

- 呉構漢訳デュ・ボアゴベ『車中毒針』——英人ブラック『車中の毒針』 ……………荒井由美
- 呉構漢訳モーパッサン『五里霧』——上村左川訳「五里霧中」の原作 ……………沢本香子
- 呉構漢訳ドイル「斥候美談」——高須梅溪訳「大佐の罪」 ……………樽本照雄
- “佚失”的《(虚無党小説) 俄国皇帝》下篇——陳景韓転訳 *Strange Tales of a Nihilist* 発表始末 ……………梁 艶
- 【書評】民初小説年表の最新成果——黄曼『民初小説編年史』について ……………樽本照雄

『清末小説から』第146号

2022.7.1

- 呉構漢訳「博浪椎」から『棠花怨』へ——黒岩涙香訳『梅花郎』 ……………沢本郁馬
- 呉構漢訳ガポリオ『寒桃記』——黒岩涙香訳『有罪無罪』 ……………樽本照雄
- モーパッサン最初の漢訳「義勇軍」——橋本青雨訳「義勇軍」 ……………神田一三
- 【書評】『清末民初報刊小説目録(1815-1919)』について——出所不明の目録を私が信用する理由 ……………樽本照雄

『清末小説から』第147号

2022.10.1

- 呉構漢訳ブーダーマン『賣国奴』(上)——登張竹風訳『賣国奴』 ……………荒井由美
- 呉構漢訳「大復讐」——押川春浪「復讐」 ……………沢本香子
- 包天笑漢訳ヴェルヌ『碧海情波記』——森田思軒訳「大東号航海日記」 ……………樽本照雄
- 陳景韓漢訳ル・キュー「虚無党奇話」——松居松葉『虚無党奇話』 ……………神田一三

『清末小説から』第148号

2023.1.1

- 呉構漢訳ブーダーマン『賣国奴』(下)——登張竹風訳『賣国奴』 ……………荒井由美
- 呉構漢訳『侠黒奴』——尾崎紅葉訳『侠黒兒』 ……………沢本香子
- 厚生「青娥血涙」は康有为作か ……………樽本照雄
- 【書評】文娟論文を評した文章を評する——陳鵬安論文について ……………荒井由美

公開中

